

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

4



第七十七卷 第四号 日本幼稚園協会



新学期です！



保育カリキュラム編成に是非どうぞ！

改訂幼稚園教育要領に即した 教育課程と指導計画

安藤寿美江・伊東金造
豊田いと・西村省吾 編著

B5判 280頁 1,000円

東京都公立幼稚園関係者が、新教育要領にもとづいてまとめた、年少、年長児の実践保育カリキュラムです。

年間保育計画

三木安正編著

B5判 172頁 650円

幼児の望ましいパーソナリティーの成長を集団生活の中に求め、長年の研究の成果として、集団生活の発展とその指導の考え方を述べる。

幼児の生活と カリキュラム

大場牧夫編著

B5判 188頁 1,600円

適切なカリキュラム編成のための準備と、遊び、生活と仕事、課題活動を保育の基礎におく一幼稚園の実践を紹介する。

幼児教育の評価

その観点と基準

三木安正編 保育内容研究会著

B5判 130頁 650円

各活動領域の評価の基準をまとめたユニークな書。

幼稚園の

1日の指導計画(改訂版)

宮内 孝・富田陽子著

A5判 184頁 700円

日案の作り方を中心として、日案の性格、展開のしかた、評価のしかたなどを解説し、さらに幼稚園での指導のあり方など多方面に詳説。

幼児の教育

第七十七卷 第四号



1978.

幼児の教育 目次

第七十七卷 四月号

© 1978
日本幼稚園協会

表紙 梶山俊夫
カット 中島英子

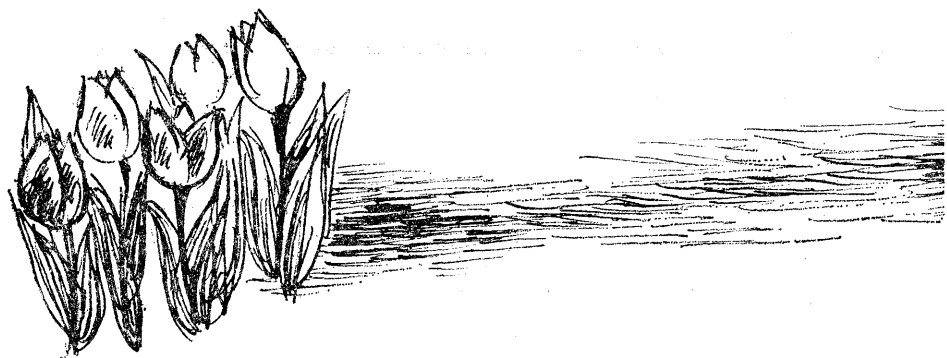
日本人の「甘え」について……………中村 英勝 (4)

冬鳥……………梶山 俊夫 (9)

オオバコとのつきあい……………藤原 勲 (12)

私の幼児教育論……………藤永 保 (16)

手……………清水エミ子 (22)



サルは木から落ちない……………岩本 光雄(24)

料理の手……………辻 嘉一(26)

手……………竹中 京子(28)

手と舞踊……………森下はるみ(30)

きっかけ……………村田 修子(32)

私の保育……………丸山くみ子(34)

子どもと共なる日々……………依田満寿美(41)

手作りの遊具・教材……………山中 久江(44)

保育過程の分析

——三歳児クラスの一年間……………大滝ミドリ(51)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(十五)……………津守 真(58)

日本人の「甘え」について

中村英勝

近ごろ精神医学者土居健郎氏の『「甘え」の構造』という本が広く読まれている。この本の続編ともいふべき『「甘え」雑稿』も刊行されている。さらに、比較社会経済史学の大家久雄氏と法社会学の川島武宜氏が土居健郎氏と三人で行なった討論が『甘えと社会科学』という題の本として出版されている。

先日、お茶の水女子大学の史学科の卒業生が数人で毎月一回行なっている読書会で、最近読んだ本について何か紹介して貰いたいという依頼をうけ、数冊の本をあげたところ、そのうちから『「甘え」の構造』について話してくれということであったので、この本を中心として、前述の『「甘え」と社会科学』、中根千枝氏の『タテ社会の人間関係』などに述べ

られていることをまじえて、私の家に集まった数人の人々に話したのであった。この日本人特有の行動様式ともいふべき「甘え」の問題は幼児教育の問題とも関連があると思われるので、今回本誌に執筆を依頼された機会に、この問題について若干述べさせて頂きたい。

『「甘え」の構造』の最初の部分で、「甘え」とか「甘え」るかという語が日本語独特の語彙で、英語にはそれに対応する語がないことが指摘されている。また大仏次郎の『帰郷』のうちから「肉親だからといって余計に甘えたり憎んだりする日本人の感情だな。あれがおれはいやだ。それだけは卒業したつもりだ。隣りの他人とどう違うのだ」という一節を引用したのち、「これは外国で永年生活した作中の主人公の感慨で

あるが、おそらく外国でしばらく生活した者だけが、これを感じとることができるのではなからうか」と土居氏は述べている。日本人のうちには、「身内」（血縁者）に対しては、「わがまま」のしほうだいをしたり言ったりして、迷惑をかけることを何とも思わないが、「他人」（血縁のない人々）に対しては恐ろしく遠慮がちで丁寧な人々が、相当多くいる。また血縁者でなくても、同じ組織の中の「身内」や「仲間」の間の「仲間意識」がきわめて強く、「他人」に対しては冷淡な場合が多い。「ウチの会社」・「ウチの学校」などと言って、ソ者と区別する言い方が行なわれる。行業地に行く電車に乗る場合などによく見かける光景であるが、親子兄弟や仲間だけで多くの座席を占拠し、他人に迷惑をかけても平気である。バスの中などで子どもが他の乗客に迷惑をかけても、何とも思わない母親が多い。このような場合、欧米の母親は子どもをきつく叱るという。日本人には「公德心」とか「パブリック・スピリット」がないと言われるゆえんである。これは、身内にはわがままをいうが、他人には遠慮するということと正反対のように見えるが、「身内」と「他人」で態度が全く違うという点では共通している。

このような日本人の特性はどこから来ているのであろう

か。土居氏は「甘え」の言語的起源を探索して、「甘え」の語幹であるアマは、日本人ならほとんどすべて最初に口にする乳児語ウマウマと関係があるのではないかと推測する。

『大言海』にも、「甘し」は「旨し」に通ずる、とある。「甘え」の心理的原型は母子関係における乳児の心理に存するということとはあまりに明らかである、と土居氏は断定している。中村元氏も、東洋人の思维方法を比較研究した結果、日本思想の特に顕著な傾向は、閉鎖的な人倫的組織を重視するということである、と指摘している。（『東洋人の思维方法』3）「甘え」の感情が幼児期だけに限られず、成人になっても存続し、「身内」や「仲間」の間で狭い閉鎖的な「甘え」の世界を構成している。そして古代人の家族社会で形成された「甘え」の原体験が現代に至るまで保存されたのは、日本が孤立した閉鎖的な島国であったことと無関係ではないであらう。

大塚久雄氏は前述の討論の中で、マックス・ウェーバーの「理解社会学」の体系における「パトリモニアリズム」（家産制）および「ピエテート」の概念を「甘え」の概念と関連させて、議論を展開している。川島武宜氏は『日本社会の家族的構成』という著書の中で、「ピエテート」を「恭順」

と訳しているが、古代ローマ人は「ピエタス」という言葉で、下から上への「恭順」を表わしただけでなく、親の子どもに対する愛情や友人どうしの愛情も「ピエタス」の概念に含めている。ローマのサン・ピエトロ寺院にあるミケランジェロの彫刻「ピエタ」——聖母マリアが死せるキリストの体をひざの上に抱きかかえている彫刻は有名であるが、これは母マリアの子イエスに対する愛情を表現している。

「ハウス・ゲマインシャフト」(家共同態——家族共同体)は「ピエテート」という規範感情ないし倫理的意識、すなわち「恭順」や「愛情」によって支えられているものであり、中心の「家共同態」と従属的な「家共同態」の間に「ピエテート」(恭順)に基づく支配——被支配の関係ができてくる。これが「家父長的支配」であり、これが成長して「家産制支配」(パトリモニアール・ヘルシャフト)となる。日本式に言えば、「本家」の家父長に対して「分家」が「恭順」の意識をもつということである。大塚氏によると、このような

「ピエテート」の概念に甘えの概念を補って考えると、本家と分家との支配——被支配の関係、保護と従属の関係もよく理解されるというのである。

西洋ではこのような「ピエテート」の感情は非情な権力に

より、また諸民族の激しい移動や戦争により抑圧されてしまった。ところが島国日本ではそれほど激しい戦争や移動もなく、「甘え」の行動様式が親子以外の社会関係にも拡大された。親でない他人に対して甘えの關係が形成されたのが「親分〱子分の關係」で、こうして「日本社会の家族的構成」が成立したのであると川島氏はいう。

ここで思い起こされるのは、イギリスの文明史家トインビーが述べていることである。彼は人類社会と自然環境の間の、また諸文明の間の「挑戦」と「反応」の關係を重視する。「乾燥」という自然環境の挑戦に対する反応として、西南アジアや北アフリカに人類最初の文明が発生したと説いている。彼はまた、シリアのような諸文明が激しくぶつかり合った「文明のロータリー(円形交差路)」で、ユダヤ教やキリスト教のような「高度宗教」が生まれたと説いている。エジプト・バビロニアなどの強大な諸勢力にはさまれた弱小民族であるユダヤ人によって、きびしい倫理的な人格神であり、宇宙の創造者・主宰者である唯一神ヤハヴェの觀念が形成された。これに対して日本では八百万の神々があり、神々は人間とあまり変りなく、江戸中期にすでに新井白石が言ったように「神は人なり」である。すぐれた人が死ねば神として神

社に祭られ、普通の人でも死ねば、仏教における戒名のように、「……のみこと」という名を与えられる。このような日本では、天地万物の造物主であり主宰者である唯一神という観念はなかなか理解され難い。

中国では、天子は天命（宇宙の主宰者である天帝の命）を受けて天下を統治するものであるから、不徳の天子が現われれば追放され、別の有徳者が天命を受けて新しい王朝を開くという「易姓革命」（天命が革まって王朝が易わる）という思想が形成されたが、日本では、天照大神の子孫が、天地とともにきわまりなく、「万世一系」の天皇として統治するとういう「天壤無窮」の思想が形成された。こうして日本では長い間、「世襲の原理」・「血統崇拜」の思想が尊重されてきた。中国ではまた、徳をもって治める「王道」を尊重し、武力や権力で統治する「霸道」をいやしめ、「王・霸の別」を強調する考え方が形成された。そして漢民族は文化の高い中国を「中華」と誇り、周囲の異民族を「夷狄」として軽蔑する「中華思想」をもっていた。宋代に北方の異民族が華北に侵入して国をたてると、夷狄が霸道でたてた国を「正統」の王朝として認めることはできないという「尊王攘夷」の思想が盛んになり、中華と夷狄、王道と霸道の区別を強調する「大

義名分論」が唱えられた。「尊王」の「王」は中国では「王道」の意味であったが、尊王論が日本にとり入れられると、天皇の「皇」となり、尊皇攘夷論として討幕運動と結びつくようになった。儒教的な王道思想と結びついた「尊皇論」は武家政治を「霸道」として排斥したのであった。国学者は儒教を排斥して復古神道に基づく尊皇論を展開したが、この儒学と国学の二つの系統の「尊皇論」は、幕末の日本人に大きな影響を与え、明治時代に天皇制国家が成立してから昭和のはじめに至るまでの日本の教育を支配した。このような「皇国史観」は第二次世界大戦の敗戦によってようやく崩壊したのであった。

以上見てきたように、西南アジアのような諸民族・諸文明が激しくぶつかり合ったところでは、きびしい倫理的な唯一神をもつ「高度宗教」が発達した。また中国民族のように周囲の「夷狄」と激しく対立し、しばしば彼らによって征服された経験をもつ民族の間では、「王道思想」や「易姓革命」の思想が形成された。これに対して、周囲を「海」という自然の濠で守られた日本では、きびしい「高度宗教」が成立せず、「血統の原理」や「世襲主義」が温存された。これは、日本人の社会で「甘え」の感情や行動様式が現代に至るまで

温存されたことと無関係ではないであらう。

私は「甘え」を全面的に否定しようとは思わない。母親の乳児や幼児に対する本能的で無条件かつ絶対的な「愛」ほど尊いものはない。人類はこれがあるからこそ、これまで存続してきたということもできよう。人類のみならず他の動物の場合にも、母親の愛情とこれに対する子ども「甘え」が見られるが、これは「種の保存」のための天の配剤であるときみなすこともできよう。しかし幼児期から少年期・青年期と「人格」が形成されるに従って、「甘え」から「卒業」しなければならぬことも確かである。日本の青少年はこの時期に激しい受験戦争にまき込まれ、家族の「過保護」のもとに置かれるため、「甘え」という「受身的愛情希求」から脱却し切れないのだとも言われる。過保護のもとに受験戦争にうち勝つてエリート・コースに乗っても、或る日ふと空しさを感じて、また他の場合には受験戦争に敗れ挫折感にさいなまれて、自殺をはかるといふことにもなりかねない。

「自分がある」とか「自分がない」とかいう言い方も日本語独特のもので、外国語にはないものであるという。「自分がない」といふことはどういうことであらうか。日本の歴史に

はルネサンスも宗教改革もなかったため、きびしい責任倫理に裏付けられた個人主義——個人の人格の価値という理念が確立されなかったと言われる。これは江戸時代に日本民族が長い間「鎖国」の状態にあったことと無関係ではないであらう。しかし現代世界において、国土が狭く資源乏しく人口だけが大きい日本が国際社会に孤立して生きてゆくことはできない。敗戦後日本は独立しても、日米安保条約によって軍事的に保護され、自衛隊はあっても国防費は国民総生産のパーセント以下ですんできた。このような条件のもとに日本経済は高度成長をとげ、日本は自由世界第二の「経済大国」となった。今日の日本はもはや国際的な「甘え」を許されない状態となった。日本民族全体として、また日本人ひとりひとりとして、「甘え」から脱却することが重要な課題となつていく。これは幼児期に始まる日本の教育の今日的な課題といえるのではなからうか。

(お茶の水女子大学)



冬 鳥

京都午後二時三分登山陰線出雲行に乗った。丹波の山にぎらぎら太陽がういてまぶしい。優しい山が高さを競うでもなくつづく。福知山をでると、落ちる太陽めざして一直線に向かう。枯スキが真っ赤にもえて光ってとんだ。ずっと空ばかり見ていた。矢名瀬でまたのんきに停っている。こんもり山が沈んできた。裸の桜並木を川筋が白く光ってこれも静かに止ってみえる。暗くなつていく。米子に着くのは九時すぎだ。

冬の田んぼの中で野球をしていた。手づくりの布のボールを追いかけて稲株をびよんびよんよけて走った。みんな地蔵のようにつつ立って動かない。ボールを握ってほろびを手におしこんでまた投げた。沈んだ田がどこまでもひろがって投げたボールをさがして追った。停っ

梶山俊夫

た。窓の外に白い標識がうかんた。八鹿^{やうか}とあった。ぼんやり車中の天井を眺めて、また田んぼに下りていく。名前も忘れた昔の幼友だが、みんなこちらに背をむけて西山の方を向いていた。みんな鳥がどつとどびだすのを待っていた。走りだすまでいっしょに西山を見ていた。次はどこに停るのか、ごそごと車内マイクの声に目をあけた。やっぱり空ばかり見ていた。空も沈んでまたねむくなった。

一枚の小さな古版画がこたつの上にあった。なまけもの二人の男が酔いざましに話していた。

……これはまたのんきな仕事だね。優しいね。

……欲もなんにもないな、まいったよ。

……海岸にころがっている流木だな。どうひっくりか

えしてもかたちになってるぜ。

……こっちを信じきっているんだ。よけいなものはみんなすてちまってるな。

……子どもの絵ていうのは宇宙なんだ。こいつは宇宙とであってるんだ。

……宇宙か、宇宙は冷静だぜ。

……冷静だよ。だからたいへんさ。

……であうにはつらいな。

……自信をもとうとするからつらくなる。

……はは、こいつはむこうがあつてこっちがあるというわけだ。平等なんだろう。

……そのとおり、平等なんだ。もともと大小なんかに

こたわってないんだ。

……おれだつてはなからこたわつてねえぜ。

……それが凡よ、こたわつてこたわつてこたわつてくたびれはててぬけていくんよ。

……それならトンネルといえ。

……おおトンネルよ、はいればいずれはだされるトンネルよ、ありがてえと思え。

……ありがてえや、こんなにわしらを楽しませてくれる仕事どこにあるか。

……まったくだ。

……これだつたらおれにもできそうだ。

……のぼせるな、死ぬまで生きて一つできるかできないかだ。

……死ぬまで生きるか。ほつ、こっちむいてわらつたら、お前さんならやれそうだって。

……こいつのりやがったな。

……そう、はいつくばつてころあいみはからつてびょんとビッキさまよ。

……ころあいはいよくねえ、まっことはいつくばつてやにこく生きなくちゃなんね。

……できると思えやそのうちできらい。

……そう、おもいこみよ。たっぶり時間はあつた。

……たっぶりないんだよ。お前さんもごくらくとんぼだね。

……いよよ、ビッキさまとごくらくとんぼのそろそろ

のお出ましか。

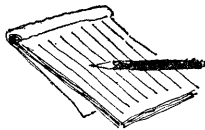
二人は立ち上がりからのそば猪口をふって置いた。とんぼの染付けがゆれた。風がでた。窓ガラスがカラカラになった。窓の向こうは小高い山がせまっていた。ちびた枯草をすっかりまだらにつけてこんもりこんもり岩肌のがぞいている。そこだけさながら華岳の絵そっくりになっていた。だれもしらない出来たての見事な景色になっていた。一羽の鳥が足早やに去った。クワアクワア、声ばかりが山の上のこった。

朝六時半わが家の小さな庭にでた。向かいの寺の櫓がすっかり紅葉をおえて、明けた空に梢の枝がピンピン天にはって吹かれている。その下を遠く数軒の瓦屋根がおしだまって日が登りきるのを待っている。さわったらカンカンと割れそうな白い空だ。今日もまたたらたらと一本の線をひくしかない。風に吹かれたら身をのぼし向きをかえじっと待ってまたのびて日に向いて夕べまで、一本の線はそんなに正直になれるものだろうか。

庭の蛙やトカゲや養虫やデンデン虫やおけらたちはもうどこにもいない。そっくり地の下でぬくもっているのか寄り合ってなにを話しこんでいるのか。ここからみる黒松ばかりが、師走のほこりをかぶったまま不機嫌そうに囁っている。しっかり葉をかかえこんで忘れものをした陰気な鳥のようだ。天に向かって思いきり深呼吸してはいた。冬鳥が空をぬけていくのにはまだ間がありそうだ。

一九七七年十二月 記

(絵本作家)



オオバコとのつきあい



藤原 勲

珍らしくもなく、美しくもなく、他の人にはほとんど役に立たない雑草であるオオバコを私が研究するようになったきっかけ、理由は次のようなことである。

まずきっかけとなったのは、私の現在勤めている学校の研究圃場の土の質であった。私がそれまでいた広島から佐賀に移って、最初に気付いたのは水や土の性質がこれまでとは大変に違っていることであったが、特に土質の違いについては、当時、研究に使用していた関係で広島から移し植えた多くの野生菊が一年たつかなかたといううちに次第に勢が衰えて、大多数が枯死してしまったことで、はつきりと思いらされた。

広島の研究圃場土は砂質であったが、佐賀の場合は粘土質であった。畠の土を改良するだけの研究費の都合もつかぬまま枯れかかったキクをながめるばかりであったが、そのうちよし、こんな畠にだってあぜ道にはえるような草なら育つはずだから、それを研究材料に使ってやろうと思いつき、それからは毎日近郊のたんぼのあぜを、草を探して歩きまわった。

ところが、なるほどあぜ道にはたくさん草が生い茂っていて、全国有数の農業県が成立する自然条件はそなわっているわいと感心する程であったが、私が当時行なっていた倍数性の研究には、さてどの草が向いているのかということとは簡単には分からない。

文献をしらべてはこれぞと思う草を採集してきて、新しい根を出させて、その根の先端部の細胞を染めて顕微鏡でのぞき、内部の染色体（遺伝子を入れている糸状の小体）の数をかぞえるということを一年間以上もつづけた。この間に観察した多くの植物の中にはオオバコも含まれていたが、しかしその染色体はさほど観察に都合がよいという大きさではなかったし、またその数も二十四本で、それはすでに他の多くの研究者が報告している通りであったから、最初はこの植物には特別の注意を払わなかった。ところが春先のある寒い日であったが、いつものように採集に出かけ、その日は大学から数キロメートルの有明海岸近くまで足をのばした。ほとんどの草は枯葉ばかりが目立った。あとでふりかえって考えると、その日海岸近くまで行ったこと、時期が春先であったこと、たまたま道が悪くて自転車からおりて歩いたことなどが幸いしたように思う。

なぜかというとその日見つけた珍しいオオバコは、これは後日の調査で判ったのだが、九州ではたいい海岸近くの場所に生育しているのであり、また春先の時期には背の高い草の多くが枯れた葉の状態であるが、オオバコは若い葉がすでに伸びはじめていて見つけ易いこと、さらにこの日見つけた種類と普通の種類のオオバコとを区別するには、葉が充分に成長した夏よりも、幼葉

の時期の方が容易であること、したがってこの時期の葉は小さいので、自転車に乗った状態であったら距離的にも時間的余裕の点からもこれを見分けることは困難であったろうということだ。

勿論、非常に似かよった植物の間の微妙なちがいを見分けるのであるから、基準になる普通の種類の形状が頭によくはいっていないければならないが、一年間余の草を眺めながらのぶらぶら歩きのおかげで、しらすしらすうちに普通のオオバコの形状が頭に残っていたわけである。

道端の枯葉の間から顔を出したそのオオバコの若葉が普通のものとはちがって、鋭いというか勢がよいというか、ハツとする位ちがって見えた。近よって観察すると普通のものより葉の形が狭長で、葉面のオオバコ特有の凹凸が少なく平滑で、しかも普通は葉が地面に密着して広がっているのにここで見つけたものの葉は斜上方に勢よく伸びているのだ。

早速その株を採取して持ち帰り、例のように顕微鏡で細胞をしらべてみた。細胞の内部に染色体がいっぱいにつまった感じで、普通のオオバコの場合のようにバラバラとした感じでない。図を画きながら一本一本染色体を数えると三十六本である。普通の種類のオオバコが二十四本であるので、明らかに染色体が増えた種類だということがわかった。普通の種類のオオバコは四倍体で

あるので、ここで見つけた種類は六倍体オオバコであったわけである。

植物界ではこのような染色体数が増えている例は多いので、この六倍体発見は大発見でも何でもないので、また、あとでしらべてみるとずっと昔、篠遠喜人先生が染色体数三十六のオオバコについてすでに報告されていたこともわかったのであったが、私がおのの後オオバコの仲間を研究するようになったとききっかけはこの六倍体オオバコの発見にあったのでここに述べたわけである。

なおこのとき佐賀の道端でたまたま見つけた六倍体オオバコは、調査の結果、北海道から沖縄まで我国に広く分布し、さらに朝鮮・台湾・香港にも生育していることが確かめられた。九州ではこの植物は普通、海岸沿いの水田のあぜに見られるが、まれに三百メートル程度の高さの山地の湿地にも見つけられることがある。

平野部ではほとんど見かけないから、人の気配のあるところにはどこにでも生えている四倍体オオバコよりも生育地の生態的条件の幅がせまいようで、人の目にふれる機会もそれだけ少ないわけである。

さて、研究のきっかけとなったのは以上のようなことであつたが、研究がある程度つづいたのは次のようなわけがあつたからである。

オオバコの花に気付かれる人は少ないと思うが、虫めがねで穂を観察すると、じょうご形の、先端が四つに分かれた白い花冠をもつ小さい花が多数ならんでいる。見ばえのしない花だが、おしべやめしべはちゃんとそろっている。春の終りから夏にかけて穂をしらべると、穂の下方から上に向かって、つぼみから白い細い棒状のものが伸び出しているのが見られる。これがめしべの先端の部分である。おしべの方はめしべより三、四日おくれであらわれる。つまりオオバコの仲間はすべて、花が雌ずい先熟といつて、めしべがおしべよりも先に成熟する珍らしい性質をもっている。

なお、これとは反対に、おしべの方が先に成熟する花をもつた植物も知られているが、この方はそれほど珍らしくはないようだ。

一つの花の内の、同じ遺伝子をもつ卵細胞と花粉とが受精することは極端な近親結婚にあたるのであるが、このようなことをさけて異なった株の花との間で受粉を行なうことの有利さを植物も知っているのであるうか、自然にこのような自花受粉をふせぐ機構が出来ているのである。

この機構は交配実験を行なう場合には大変に都合がよい。しかもオオバコの場合は一つの穂に多くの花がついているから、一度に多くの花をつかって交配が出来る。ということは普通ではめつたに種子が得られないような、成功率の低い交配の場合でも何と

か種子をつくることができるということである。私がオオバコ
仲間の植物の間で交配を行ない、これらの植物の間の近縁関係を
しらべることがやり出したのは上にのべたようなこの植物の花の
特徴に気付いたからであった。

なお、オオバコは種子にも面白い性質がある。というのは種子
を水でぬらすと外側の表皮が粘液質となり、そのため、ぬれた種
子は他の物、例えば人の手足や衣服、鍬や鎌などによくくっつ
き、そうして人のゆく場所に一緒に運ばれてゆき、やがてそこで
地面におちて芽を出す。

だからオオバコの生えている場所は人間社会とのかかわりの深
い所である。山の中を歩いてもオオバコが生えていると安心
する。人間社会の変遷つまり歴史とオオバコの分布が関係する場
合も見られ、例えば伊万里市西方の、かつて松浦党本拠のあった
地域では、普通は海岸近くに限られる六倍体オオバコの分布が当
時の本拠防衛の陣地跡に発達したいくつかの部落にそって海岸か
ら内部に入りこみ、これらの部落と海岸の部落との間に昔から盛
んに人の行ききがあつていることを示している。

以上のべたように、多くの人々には見向きもされないような道
端の雑草も、くわしく観察すれば興味ある事実が次々に知られて
くる。ここに観察ということの面白さがある。観察とは、ものを

くわしく見たり、さわったり、香をかいだりなどして、出来るだ
け正確にそのものを知ることであり、また何かに気付いたら、
「何故だろう」と考え、さらにある観点からそのものを見直して
みる——つまり問題意識をもってものをみることである。このよ
うな観察をする態度というものは、それがその人の身につつき、習
慣となることが大切である。

観察力が身につつき、常日頃からものを正確にみる事が出来る
ということが科学的能力といわれるものの基礎であるから、子ど
もたちの科学性を育てるためには、子どもたちに観察のためのチ
ャンスを多く与えることが大切であるが、基本的にはまず教師自
身が観察の習慣をその生活の中に持っていて、子どもたちに接す
ることである。そのためには日頃から努力して観察の練習をして
いくことが必要であろう。

(佐賀大学)

* * *

私の幼児教育論

—つれづれなるままに—

「私の幼児教育論」などと題するのは、気恥ずかしいし気が重い。私は、元来「論」は嫌いである。何をかいたらよいのか、編集者に訊ねたら、何でも結構ですという答が返ってきた。

何でも結構といわれると、かえってとまどう。題目がもう少し具体的に決まっているほうが、かきやすいは多いものだ。自由というのは、案外難しい。

思うに、これには、いくつかの理由がある。たとえば、細かい題目を指定されているのであれば、かりに自分は多少不得意だと思っても、向うの決めたことだから仕方がないと諦めもつこう。つまり、一種の責任転嫁ということになるわけだが、ここで大分気が楽になる。

第二は、題目が限定されているほど、直接具体的な連想が働

き、発想の段階で苦しまなくてもすむということがある。もとより、これは既製品を小出しにしているというにすぎず、基本的には決められたことではないが、テーマ探しの段階から汗をかいて苦みすにすむものである。

もう一つ、こういうこともあるだろう。題が決まっているということは、暗黙に、どんな読者がどんな興味をもってよむのかあらかじめ想定していることになる。すると、かく側でも具体的なイメージがわくと同時に、どんなしかたで語りかけようかという構えもできる。これも、筆を進めるうえで大きな助けとなるわけである。

その他、数えあげれば、まだまだ理由はあるのかもしれない。いずれにして、自由題というのは、かなりやつかしいことが自他

藤 永 保

ともに納得できればよいのである。それは、ゆくえもしらず、旅にでるのに似ている。途上、思いがけない収獲に出あうかもしれないという楽しみもある反面、どんな落とし穴が待っているかもしれないのである。いや、思いがけない楽しみすら、ぼんやりしていれば、見れども見えない状態のまま過ぎていってしまうだろう。人まかせの旅とちがって、いつも何がしかの緊張をしいられるわけである。

奇妙な副題をつけたけれども、別にふざけているわけではない。いわば、テーマはあらかじめ決め済みに、筆のおもむくまま、しばらく気ままな旅にでてみようということにはかならない。

◇自由保育の金字塔◇

気ままな旅だから、ここでのべるのは、みな一種の思いつきである。ふと思いついてあそこを訪ね、また感興に誘われてかしこにおもむき、という具合に行けたら最上であろうか。

自由題でかくのは難しいということから、連想は、自然に「自由保育」ということばに走っていく。これは、一種の金字塔であるらしいから、その偉容をしばらく眺めてみるのも一興である

う。

自由保育とは、いったい何だろうか。改めて考えてみると、よく分らない自分に気づく。なるほど、ことばというのは誠に便利な符号である。ものの名前を知ると、私たちは、そのもの自体が分ったかのように思いこむ。知っているものの名前が想いだせないといらいらすというのは、誰しも経験するところであろう。

故旧忘れうべきというが、久しぶりに会った昔の同級生の名前が想いだせない、これまたひどく不安定な気持になる。しかし、やっと名前が分ると、それに伴って、昔の顔かたちやふるまいなどが自然にひきだされてくるから、妙というべきであろう。

ことばは、認識のための万能の道しるべのようにみえる。

しかし、ここに、実は危険な落とし穴も潜んでいるのではなからうか。名前さえつければ、私たちは、そのとたんに、当の対象はすべて分ってしまったかのように思いこむ。はては、実体は定かでないことばだけが、やみ夜のこうもりのように飛びかうことにもなるのだ。ことばが、プラスの価値づけを伴うとき、この飛翔の幅は特に大きくなる。

「自由を我らに」は、何と甘美な誘惑であろうか。自由保育ともなれば、これはまず最上のものであるにちがいない。ことばの魅惑は、まことに大きいのだ。しかし、さてと改めてみると、その

実体は定かでない。

ふつう、自由保育とは、いっせい保育と対立した意味に使われている。ここからは、一方に、幼児一人一人の進度やペースやひいては発達段階ののっとなって何かが進められるのに対して、他方は、教師主導型のペースでいわば画一的に何かの目標に到達させるというイメージが描かれやすい。前者に軍配が上がる所以である。

しかし、ことは、果してそれほど単純だろうか。どんないっせい保育であっても、個々の幼児のペースを無視しては成立しないのは明らかである。幼児だから自由というニュアンスも、私には承服しかねる。幼児だけを、どうしてそう特別扱いしたがるのだろう。大学生ですら、いっせい、画一、型にはめるといふのであれば、よくよくの合意がなければ、成りたつまい。こういう対立の図式は、ことばのもつ落とし穴にまんまと引っかかっているとしか思えないのである。それは、実際に教えてみる場面を想像しさえすれば、誰にでもすぐ了解できるはずのものであろう。

金字塔の頂きを少し眺めただけで、探索はもう終りとしなければなるまい。これ以上深入りしては、帰るあてもないままに一日の行程も暮れてしまいうそである。行きずりの旅には、これ以上を期待しないほうがよい。今度くるときには、もっと周到な準備

を整え、せめて適切な案内書くらいよんでおかねばなるまい。

(誰か、良いガイドブックを教えてくださいとよいのだが……)

手作りの道具では役立たないかもしれないが、最初ののべた感想を少し想いだして旅のよすがとしよう。自由題でかくということとは、たぶん限定されたテーマを与えられるばあいより困難なことが多からう。なぜ、難しいのか。この問題を考えることは、これまたたぶん自由保育を考える道に通じているのだから。自ら、プロデューサーであり、作曲家でもあり、演奏家でもあり、そのうえ良きエンタティナーでもありと、こんな覚悟が自由保育には必要ではないのだろうか。だが、それにたえられる人は、果して何人いるか。

◇◇人間性豊かな高嶺◇◇

「語りつきいづきいかん」富士の高嶺は、古来、人々の畏れと憧れの対象であった。自然、自分の身辺にも、高嶺を求めたくなってくる。ときには、お国自慢の観なきにしも非ずであるが、「……富士」の類は「……銀座」とまではいかぬにしても、諸所方々にあるのは、少し旅をしてみればすぐ気づくことである。

ことばのわなというテーマから、連想はまた自然に美辞麗句の氾濫という問題に向っていく。このような方言を特に好む地域があるようにみえるからである。それは、教育界という世界である。

さる幼児教育の研究大会があった。主題は、「豊かな人間性を育てるために」といった類のものである。この大会に招かれて筆者は、はたととまどった。かくも壮大な目標をかかげて、いったい何をする積りなのだろうか。一日、二日、何かをきいたら、果して人間性を豊かにする秘宝が手に入るともいうのだろうか。

そういえば、私の知っている教育関係の研究大会には、何とこの種のスローガンが多いことか。いわく、「創造性を豊かに」、いわく、「思考力を育てる」、またいわく、「未来をひらく幼児教育」……。こうなると、富士の高嶺どころの話ではない。永井前文相の大好きな八ヶ岳という有様である。「連嶺の夢想よ、汝が白雪を消さずあれ」こんなイメージを遺した詩人もあったっけ。懐しいかぎりではある。

誤解を受けそうだから、大急ぎでつけ加えておこう。私は、幼児教育界に限らず教育界一般のスローガン好きをただ冷やかしてあるわけではない。冷やかすというには、これは余りにも大きな問題なのだ。まともに教育を考える人間なら、誰しも、人間性豊かといった目標に反対しはずまい。それどころか、教育者たる者

は、どんな些末にみえる教授場面にとりくんでいようと、どこかに理想的な人間像を目指し、これはそのための一つの手段、一つのステツプと考えていないものはないであらう。(問題は、各教育者の夢想する理想像には、それぞれ隔りや、くいちがいがあろうだということだが、これについては論じない)

しかし、ここで、いま一度考えてみようではないか。私は洋服を作ります、というのを看板にしている洋服屋があるだろうか。

医師は人命を助けるのが仕事です、などという医者がいたら、はてと肩につばをつけるほうが自然だろう。要するに、自明のことを恥ずかしげもなく高言するというのは、どこか慎しみを欠き、根本的に自覚を失っているふるまいだとしか私には思えない。

もっとも、今の世の中では、医は算術に墮落しかけている。だから、ことさら、医は仁術を強調しなければならぬのだという意見もあろう。それはもつともである。そこから類推すれば、今の教育界は目標とすべき理想像を見失い、その故にこそ「人間性豊か」といったスローガンをことさら強調しなければならぬのだということにもなるだろうが。

いずれにしろ、ほめられた話ではない。また、後者のようなら、これは内廻りの話だから、外に向って強調すべきではなく、むしろ、外部からの批判を待つべきことであらう。山高きが故

に、尊とからずである。厳しい自戒の気持こそ、必要ではなからうか。

美辭麗句の氾濫は、なかみの貧しさをおおいにかくす道具になつているのでなければ幸いである。富士の高嶺は、たしかに美しく偉大である。願わくば、そこに至る道も示されんことを。そうして、どのような目標に至る道も、足もとに目を注ぐかぎり、いずれも平凡無事で一見して素晴らしいなどということはないのだと、よくよく覚悟すべきであらう。野の百合の素朴さにひかれて道を辿るうちに、いつしか山頂に達するのこそ、——平凡人にとつては、ほんとうの理想であるのかもしれない。

◇◇遊びと勉強の峠◇◇◇

「富士には、月見草がよく似合う」。懐しの高嶺に別れを告げ、下ってくるのは峠道であり、そこには思いがけぬ花々の姿もみうけられよう。これから、一つそのような峠を通ってみよう。これもまた、ことばの問題といえはことばの問題だからである。

「勉強」ということばも、幼児教育界ではタブー語の一つであるらしい。反対に、「遊び」というのは、大変好ましいイメージを

賦与されている。思うに、勉強は、すぐ小学校的とか知的とか、(幼児教育界にとつては) マイナスのイメージをよび起すからである。そこで、幼児の生活は遊びなのだということが強調され、はては何にでも、遊びという接尾辞がつけられる有様である。幼児の教遊び、ことは遊び、科学遊びの類は、枚挙に暇がない。まるで、遊びという呪文を唱えたとたんに、灰色の小悪魔も幸福の青い鳥に変身するといわんばかりの有様なのだ。

実をいうと、筆者自身も、「勉強」ということは余り好きではない。いずれ中国起源のことばにはちがいないのだが、日本語に翻訳すれば、勉強強いる、とよめる。つまり、いやいやながら仕方なしにやる、強制されて努力する、そんなニュアンスがつきまとう。これに反し、遊びは、楽しくて自発的・主体的に行なう活動とみなされている。勉強と遊びとの勝敗は、これでは、昔から明らかだったといわねばなるまい。

しかし、私たちは、商人に「もう少し勉強しなさい」などときく。こういう際の勉強と、勉強の意味での勉強と、同じことばをあててどうして平然としていられるのだろうか。

怠惰な筆者には、長いこと、この混同が疑問の種であった。ところが、たまたま、シューという中国系の学者の『比較文明社会論』という本をよむ機会があった。このなかで、彼は、日本人が

いかに中国語の意味をねじまげて使っているかといういくつかの例を引いており、そのなかに勉強というこぼも入っていた。

何と、勉強とは、強制する、無理じいするというのが本来の意味だそうである。商人に「勉強しなさい」というほうが、実は原義であったのだ。それが、どうして、いつごろから、勉強の意味に転用されるようになったのだろうか。これは、筆者にとつて新しい疑問の出發であり、ときどき怠惰な頭の片隅にふと浮かんでは消えない問題でもある。

ともあれ、強制が勉強の意味に転用されるとは、みごとに文化的誤訳の一例ではなからうか。と同時に、このことばは、私たち日本人のもつ、古来からの勉強観の所在をよく物語っている。幼児教育界の「勉強」嫌いにも一理はあり、案外深い真相を直観的に洞察しているというべきだろうか。

しかし、それなら、勉強と対比的に定義されている「遊び」に對しても、ここで根本的な反省が必要なのではなからうか。勉強とは、嫌々やるもの、強制されて仕方なしに行なう活動と頭から思いこんでいるからこそ、遊びに軍配が上がるのだ。しかし、この区別が妥当なものでないとすれば、まったく新しい展望が要求されるだろう。

遊びと勉強とを分ける峠からの眺めは、一方は誠に好ましく、

他方は苦渋に満ちている。しかし、私には、この境界は、余りにも伝統的、余りにも人工的にみえるのだ。それは、私たち日本人の心の奥底に巣くっているただの幻ではなからうか。しかも、この幻のために、今の日本の子どもが一つの不幸の極限に心ならずも到達しているとすれば、なおさらである。

私は、この峠を掘り崩さなければならぬと固く決心している。たとえ、そのために、自然破壊の汚名を着ようともである。

Ⅱ了Ⅱ

(お茶の水女子大学)



手

清水エミ子

ひろしくん おはなしするとき みてたら

ずぼんのところで てのゆびがひとり

ピクンと うごいてたんだよ

そしたら こえがでて おはなしがはじまったんだよ

てのゆびが おはなしの スイッチみたい

だってひろしくん かおがあかくなつたもの

(けいこ 六歳)

てって どうして ゆびがあるの

ゆびは みんなせいがちがうんだね

ちっとずつちがって ほねでまがって

そうか なんかもつからだね

でもどうして おんなじせいでないの

そうか わかった はたらきかたが みんなちがうから

おんなじせいに しておけないんだね

おんなじにしておくよ けんかするから

(けんじ 五歳)

こうやって、子どものことはをきかえしながら、筆をはしらせていると、手の指のはたらきの違いが、はっきりわかります。

からだのなかで てがいちばんくたびれる

そのつぎ あしだね

ちがうかな あしがいちばんで

そのつぎが てかもしれない

ちがうな ては あるかなくても

なにかしている はたらいている

だからやっばり てがくたびれているんだ

(だいすけ 五歳)

こんな、ことがきこえてきます、すると手をしみじみと見つめてみるのです。ほんとうに、ごころうさまと、あいさつしたくなるのです。またまた、子どものことばが、きこえてきます。

おやゆびは いつでもいつでもはたらいて

ちからをいれて くだびれるから

おおきくならないんだね でぶでちびだ

おやゆび はなしてもつのとつても もちにくいよ

それに あかちゃんのと きなめたから

くすぐったくって わらってたから

せがのびなくなったのかもしれないよ

(ゆみ 六歳)

あかちゃんの、ゆびしゃぶりの、ともだちから、大人の仕事の
あいてをしている手を、いまさらのように見つめてしまいます。

子どもたちが、人生をかくとくしていくのも、この手をかり
て、いろいろのものに出会うからではないでしょうか。

いじくり、たしかめながら、そのころよさ、しっばいのくや
しさを、心につたえていってくれるのが手です。指です。指の先
です。指先のごきが、子どもたちの、いいえ、人間の心を表わ
しているのではないのでしょうか、心は顔の表情だけに出るのでは
ないと思うのです。指先にこそ、心のすなおなさけびが表われて
いるのです。

赤ちゃんの指をみてください、こわい、うれしい、たのしいこ
とが、手の指先の動きに表われているのです。

幼児が、鉄ほうをにぎり、クレヨンをにぎり活動にちょうせん
するときの意欲は指先に力はいり、きんちょうしています。

はさみをもって、きれいなとき、クレヨンをもって、かきたく
ないとき、指先はほんやり、ぐんにやり、力が入っていないので
す。指先は降参して、弱々しい表情になっているのです。

指が生き生き、赤みをもっている子どもは、幸せなのではない
でしょうか、喜びがあふれます。

手は生産のためにあるものです。物を生産するだけでなく、人
生全体を生産するのです。

手を生産的につかえる喜びを、子どもたちに知らせることが大
人の役割でしょう。喜びのために手を動かす心地よさを、ひとつ
でも多く味わわせることです。

ボールをはじめつかんだ子どもの、笑顔と、なかなか、はな
しながらない指と手をみのがしてはならないのです。

いっしょうけんめいかいてたら、

くれよんと てが なかよくしすぎて

あせかいちゃったよ ほらね みてごらん

(みよこ 五歳)

(大田区立蒲田幼稚園)

サルは木から落ちない

岩 本 光 雄

ある意味で、人間の手の構造はひじょうに原始的なものである。何億年にもわたる動物の進化の歴史の中で、五本の指をもつ手はひじょうに古い伝統をもっているからである。現在すんでいゝるさまざまな動物の中には、五本指を典型的な形でもっている動物はむしろ少ない。五本の指をもつ古典的な構造をした手は、サル類以外の動物では、進化の過程で大なり小なり変形してきてしまっているのである。

よく、サルからヒトへといわれる。私どもの手も、サルからゆずり受けたものだからこそ、今のような形をしている。サルからヒトへに対応する生活の歴史は、一口にいえば、樹上から地上へである。サルが原始的な五本指の手を保存しつづけたのは、五本指の手のままの方が樹上生活に便利だったからである。というより、五本指の、つかめる手を利用して樹上生活への道に入ったということもできよう。五本指の手の活用に成功したのである。

手のひらを見ると、指の部分も含めて、皮膚の全面に細い隆起

線——皮膚隆線——がぎっしりつまって並んでいる。その線が指先で作っている模様が、有名な指紋である。同じような皮膚隆線は、いわゆる下等なサルの手のひらにも部分的に認められるし、高等なサルの場合には手のひらの全面に発達している。チンパンジーなどの類人猿の場合には、指紋の模様そのものが人間のにかなりよく似ている。

私どもと同じような形の、つまり長い指を備えたサルの手は、樹上で枝をつかむのに適しているが、そのつかむ動作を機敏にやるのに、皮膚隆線が実に大きな役目を果している。皮膚隆線は触觉を鋭敏に感ずる構造をもち、豊富な神経を内蔵しているから、他の木や枝へ飛び移った時に、その表面に手がさわった瞬間をキヤッチするのに便利にできている。かくてサルは、めったに木から落ちないですんでいるし、木から落ちるサルがことわざにもなりえているのである。

もちろん、サルの手は枝をつかむだけに利用されているのでは

ない。いわゆる前足として、歩くのにも使われているし、食べ物をつかんだり、毛づくろいをするのにも使う。

しかし人間の場合は、手は姿勢の保持や移動からは大きく解放され、本来の意味の手の役割を果たすようになっていく。しかも人間の場合、知脳の発達が手の手としての役割をひじょうに高級なものにしている。このあたりは特にくわしく説明するまでもないこととして、要は知脳をつかさどる脳が考え、構造上、器用な手がこれを実行するという関係になっている。

ここまででは一種の順当な話である。しかしこれから先は、筆者の科学的スペキュレーションである。それは、脳が命令者で手が実行者だとばかり、単純に考えなくてもいい面があるということを書きたいのである。

たとえば、特に脳からのはっきりした命令がないままに手が働いていることはよくある。それを無意味な動作だとして、無視するならまだしも、抑えつけようとするのはどうかなと思わせられることがある。

具体的にいえば、何とはなしに指先や手のひらで机の上をこすっていたり、ひたいをさすってみたり、あるいは指先同士をこすってみたりする動作。よく考えてみると、軽くストレスを解消している効果を果している時があるようにも思えるし、そう重大な

ことではないが、自分の心の機微にかかわるちょっとしたことについて、何かいい知恵はないかと自分をうながしている動作に思えるようなこともある。

子どもの場合にはもつと直接的に愛情といったものにかかわっている場合がある。毛布を手でまさぐってはいくらでもない子ども。それは、ぬいぐるみでもありうるし、布切れでもありうる。子ザルを親から離して育てると、いつもタオルを手にしていないと不安がったりすることは、決して珍しくはない。

人間もこうして、まだ動物なのである。特に実際の目的もなく、指先や手でものをこすってみたり、さすってみたり、握っていたりするのは、悪いくせだから止めよう、止めさせようと考えるのは、無駄というものだろう。強行すればストレスをこうじさせることになりかねないと思う。握ってはいなくて、あるいはつかまっていなくてはならぬことが、サルでは実に多い。母親にかまって育ち、大きくなれば枝につかまって安眠する。人間にも、なお、それに似た何かが手の感触をめぐって存在するのだろう。精神活動の豊かな人間の場合には、その延長として、手の触覚から発して、脳を活性づかせる効果も生じているのだろうという気がしている。

(京都大学霊長類研究所)

料理の手

辻 嘉 一

料理とは、手の動きによって生まれるもので手を加えることなしに料理はあり得ません。

そして、料理上手とは同じ仕事のくりかえしの回数が多い人のことで、頭のよいわるいではなく、回数を重ねて体がおぼえ、自然に手が動き、良い料理となるのであります。

しかし、仕事にかかる直前には必ず手を洗う習慣をつけなければなりません。

左の掌をひろげて、親指をぐっと反り返るようにならばし——残り四本の指を揃えた上に御飯をのせて締めつけると、長いおむすびの形となりますが、上と下とへ御飯がはみだすので、右の親指と人差し指とでそれを留めて形をととのえ、円筒形の食べやすい姿にいたします。

さらにおいしいおむすびは、両手の凹みを合せた中で御飯を丸

めているうちに、自然に生まれでる楕円のまるやかな姿でありまして、玉むすびと申します。

むすび——とは、産巢日の三字でありまして、古代の神の御名でもあり、温気と水気と塩気の三つによって、万物が生まれ出る神秘を現わす言葉であります。

水で手をしめらせ塩をつけてから、温かい御飯をのせて、しっかりと締めつけてむすぶのでありまして、そのおいしさは、木型を使ってつくる御飯と、食べくらべてごらんになれば、はっきりと大差のあることが感じられます。

この不思議なおいしさは、つくりだす美味ではなく、かもしだされる美味であると、つくづくと感じるのであります。かねがね、このかもしだされる神秘的な美味につながる神様なりと信じております神社があります。

神魂の二字でカモスと申上げる神様で、松江市の山手に鎮座されておられ、出雲大社よりも歴史の古いお宮だそうであります。社殿は大社造りそのままを小形にした誠に尊い御宮であり、小高い清らかな神域は静寂そのものであります。

ビルマ戦に兵隊で行っておいりましたので、南方の人達の食事風景をよく眼にいたしました。固いめのご飯にお菜を手際よく混ぜ合わせる指先の動きに、もうすでに味を感じており、食欲の先端は指先にあるとでも言えそうな、食べものに触れている楽しさがありありと感じられました。

われわれの箸使いの食事より以前に、本能的な触れる喜びのあることは、まことに幸せな食事法ではないかと思いました。

そのことを知ってからは、にぎりずし屋の店に入っても、いつもつけ台の前に座をしめ、じかに手を触れ、食べる喜びに浸るのであります。

そして、にぎる人によつての握り加減に手練の旨味というものが、固からず軟かすぎずの名手は、案外すくないようにさえ感じられます。

温かい手の人は、にぎりずしの職人にはなれないと古来言われておりますが、にぎりずしは、おむすび御飯とは反対に、固く旨味をむすび込むのではなく、軽く握って生ま身と御飯を密着さ

せ、しかも御飯はふうわりしてなければなりません。

温かい手でながくかかって握っていると魚に手のぬくもりがつるので、できるだけ早く握り、手から放すのが握り上手と言われており、結局は数を重ねる手練のいる仕事であります。

もともと日本人は、手先の器用な民族で庖丁を手にしても、左の添え手によって見事な腕前を發揮してくれますし、箸をもたせても箸さばきもあざやかに、軟かい玉子焼を二本の箸で太く巻きあげます。外人はその手際の上さに啞然とするそうです。ところが、終戦以来の学校給食の普及によつて、食事の簡便さを尊ぶのか、箸を使わず一本のメロンスプーンのようなものでの食事だそうであります。

資源をもたない日本が隆盛であることは、加工業の発達によると聞きますが、その基礎をなすものは、民族の優秀性にあるのでしようが、手先の器用さを見逃すことはできません。その手先の器用さの原因の一つに、毎日の食事の箸使いによるところが大きいのではないでしょうか。

このことは、将来の日本を考える時、黙殺してしまえないように思えるのであります。

(辻留主人)

手



「眼は口ほどにものを言い」という諺を、私は「手は口ほどにものを言い」といわせていただきましたよ。

私のながい幼稚園生活を通して、数知れぬおさな子と出会い、夢ふくらませて、先生と声をかけ両手をさしのべる子ども達——不安なまなざしでじっと見上げているその手を優しくそっとにぎって迎える時も握手であり、そのたくましく育った手をさしのべて先生元気でねと力強い言葉を残して去ってゆく時の手のぬくもりを感激の涙で送るのも握手であることを想い、このたび拙いペンをとらせていただきました。

春四月ともなりますと、忘れることなく、新しい息吹を春風にのせて、何処の園にも祝福の香りとどける大自然の恵みに感謝せずにはいられません。入園式を待ちきれないで、門の横にある一本の桜も、見事に花開き、花吹雪となって舞う中を、歓声をあ

竹中京子

げて走りよってくる子ども達のはかるいまなざし。母親の手を離さないで涙を浮かべている○○ちゃんに明日から遊びましょうねと言葉をかけた時のあの安堵のほほえみを見ます時、母親にかわって豊かな愛情を注いであげることが、私達の使命であり、責任であることを痛感いたします。

先生の手はまわりかね、保育者の一番悪い姿と知りながら、顔をこわばらせ、自分でできるでしょ、一人でするのよと叫ぶ幾日かであることを反省し、今年こそ余裕をもって子ども達に接することを誓う私でございます。

梅雨の季節ともなり鬱陶しい日々が続いて、やりきれない気持ちにかられる時、ふと晴れ間に光を見せて、子ども達を一斉に初夏の庭にさそってくれることも楽しい想い出として残っておりま

す。雨に濡れたチューリップの花が、深紅にもえて美しく、黄色

や紫のすみれの花と調和して、子ども達に披露してくれますのは、春の終りを初夏につげる情景として子ども達の心をとらえたことと思います。

手をつないでなかなか離さなかったMちゃんも泥の中に動いている玉虫をみつけて、眼を輝かせて、真剣に見入っている姿に、自然がこんなままで子ども達の心をとらえるものかと、意欲はこのような機会に育てられていくことを教えられました。

折る、切る、作る、すべて手をつかっつての手仕事であつて、経験のつみ重なりが自信につながることも子ども達の生活を通してみることができました。

男の子どもも女の子の子どもも特によく遊ぶものは、鉄棒、登棒、砂遊び、リレー等すべて四季を通してみられる楽しい遊びであるようです。両手で赤い玉、白い玉を籠に入れて勝敗を競う運動会の行事も忘れられない思い出のようでございます。

九月には世界のホームラン王が日本に生れたことで、子ども達にとって話題の中心はもっぱら王選手に集まり、年長組のFクラスの中は、年少組の応援も含めて巨人ファンになりきつて雨の日も風の日も終日野球熱にかざされていたのも面白い現象であつたと思います。

お互いにルールを守り、一塁、二塁、三塁、ホームといったよ

うに、ホームランを打つて走るそのすさまじさ。雨の日は玄関の広間を利用して遊びます為に、活動するには少しかわいそうにもなりますが、子ども達で計画し、実行しているのをみると、よく考えている場合と、注意しなければならぬ場合と、ほめたり、たしなめたり忙しい日々です。しかし何事にもかえがたい幸せを感じております。

一夜の雨に園庭が黄色い絨毯をしきつめた美しさに変わったことも、銀杏の葉を花束にして、家苞いんとうにしたことも、冬になって幼稚園の庭を銀世界に変えたこともみんな楽しい思い出でした。

手袋をはめて、長靴をはいて雪合戦に興じ、雪だるまをつくつたことも、冷たく真赤な手をふしてくれた私の手で包んであげたことも、冬の楽しかった思い出として脳裡を駆けめぐります。

池の水を手にとって、冷たさを感じない程のよるこびをもたらしにくれるものは何なのでしょうか。子ども達の手は偉大な芸術を生み出す力となり、高らかに歌つたその音は、不滅の響きを残して次の世代に受けつがれてゆくでしょう。その無限の可能性を秘めて育てゆく子ども達のために、愛情をおしまない先生である為に、努力し、高い理想に向かって前進してまいりたいと思つます。

(十文字幼稚園)

手と舞踊

花をかざしの天の羽袖

なびくも返すも舞の袖……” (羽衣)

と霞の中に舞いながら消えうせた天女のように、「舞」とは手振りが主となるものをいい、これに対し足を多く用いる「踊」と具象的な所作をあらわす「振」が日本舞踊の分類としてもちいられている。

「舞」では、扇など手に何かをもつて演じられることが多い。

これについて増田氏は、能を「扇と白足袋の美学だ」とのべているが、「心は十分に動かし、動きは七分にとめよ（動十分心 動七分身）」（花鏡）といわれる動きの意図的な抑制の過程で、ちらとこぼれる白足袋や、手先とその延長である扇の演ずる役割は決定的なものとなる。

日本舞踊のまだ初心者者の稽古をみたが、手先や扇の操作に関し

森下はるみ



(写真・青木信二)



て周到でこまかな指示が身体のどの部分より頻繁になされていた。これに対し、クラシックバレエの稽古の指示は対照的である。たとえば足を外輪に一八〇度外旋させて立つ基本姿勢にしても、「足をひらいて」の指示は皆無で、「おしりをしめて」とか「ももの後をしめて」という指示ばかりである。こうして骨盤や大腿部の外旋筋群を意図的に収縮させることで、膝や足の外旋が結果するという考えかたである。

日本舞踊と西洋舞踊の身体訓練や身体感をこれで見ると、日本舞踊はより“遠位的”“末端的”であるのに対し、西洋舞踊は、より“近位的”“中心的”ということができるとはならないだろうか。

日常、私たちは手 (hand) と腕 (arm) を区別することなく対話にもちいている。同様に足 (foot) と脚 (leg) の場合もそうである。この点が日本語と英語の大きな差異の一つであることを長谷川氏はじめ多くの比較言語学者が指摘している。

同様に、肘から手首までの前腕 (fore arm) と肘から肩までの上腕 (upper arm) に相当する日常語をもたない。しいてさがせば“小手”と“二の腕”であろうか。そこで幼児の身体部位の識別についても、英語民族なら六歳ごろから可能だという前腕・上腕の区別も、日本では大学生の九〇%以上が言語化できないということになる。

これも踊りの装束に代表される着物文化の影響か。あるいは、“手羽”とか“手羽さき”とかいうように動物の肉の解体と区分けを必要としなかった農耕文化の名残りであろうか。

(お茶の水女子大学)

き っ かけ

村田修子

ある一つのことに興味をもってやる、今迄とは違ったことをする、とか、何か新しいことを始める、という状態を考えてみますと、必ずそうなるべき動機があったとか、きっかけがあるものです。

「どうしてそうなったの？」というように聞くと「成りゆきでなんとなく」とことはではそういう人も多いのですが、それにしても意識はしないまでも、何等かのきっかけはあるものです。

ちなみに自分のことを振り返ってみますと、何故自分は幼児の中で生活するようになったのかしら、と不思議になることがあります。

スポーツが何よりも好きだったので、陸上競技のコーチになって若い有能な人を見つけ出して指導し、オリンピック

選手に……等と想っていた自分が、全然方向の違う仕事に長い間たずさわっていることは、生涯に一度しか通ることのできない道を歩くにしては余りにも違う状態になっていることは、何といても不思議な気がするのです。これについてもやはりきっかけがあるのです。

戦時中の無理がたたって身体をこわして静養していたとき、再就職の場として師範学校と、幼稚園の話が同時にありました。私としては幼児の世界は全然経験のないところでしたが、師範学校の教師になることはどうしても気が進まなかったからにはかならないのです。これは全く勝手な推測だったのかも知れませんが、師範学校の生徒は生まじめ一本やりで笑う余裕もゆとりもない毎時間のような気がしたので、といて幼稚園の仕事に自信があったわけではないのですが師範の固い感じよりはすくわれるように思いました。ですから、師範学校ではなく高校や中学の話であったとしたら必ずしも幼稚園にはきていなかったのではないかと思えます、人間の運命は思わぬことが方向づけがされるものだと思わずにはいられません。

それにもう一つ決定的なことは学生時代にそのお講義を興味をもって伺った倉橋先生が園長でいらっしやることでし

た。

そんなきっかけでいま自分がこうしていることを考えますと、運命の数奇さひとしお、というところですか。

こういう思い出話はさておきまして、きっかけについて最近感じたことがあります。

外国の人は社会人になっても、学生時代にしていた運動を続けるとか、社会に出てからなお一層運動不足を補うためにいろいろな運動を始めることが多いようですし、またそれをすると思うと容易に運動のできる場所が完備しているのです。

日本でも最近各地にアスレチック・クラブが誕生し、水泳に体操にテニスにと、昔は一番忙しく仕事に追いまくられていた女性が多く参加しているようです。ときには子どもたちを園にあずけ、その間の時間を利用して例さえ聞きます。また母と子の教室、と銘うって、その関係を持たせた扱いをしている場合も多いようです。

ここではこれ等の是非を論ずる、ということではなく、それと同じように今流行のフィールド・アスレチックという、鍛錬するためのいろいろの施設、簡単に言ってみますと障害物競争のようなものですが、それをしつらえられたところへ

出向いて行ってやっている様子をテレビで見たとき、今昔の感にたえなかつたのと、これもきっかけだ、と思ったのです。

昔、乗物が発達していなかったときは歩くことが当然でしたし、ぶらさがる、よじのぼる、ころがる、這う、とぶ、などということは身近なこととして、特別な意識をしなくてもやっていました。それが環境の変化で簡単にできなくなった現在ではこういう場が不自然ながらも作られて、こういう運動が必要だと意識した人間がやりに行くわけです。

こういうように変わってきてしまった感慨とこういう設備というきっかけがないと仲々実行できない人間の弱さを感じたのです。

新しい子どもたちを迎える四月は、新しい環境に対して不安そうにしている子どもたちを一日も早く楽しいところとしようようにさせ、しあわせに満ちた顔にすることが必要です。そのためにはいろいろな場でのさまざまなきっかけがたくさんあることを心に刻みこみ、それをとらえて有効に生かしたいものだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

私の保育

丸山くみ子

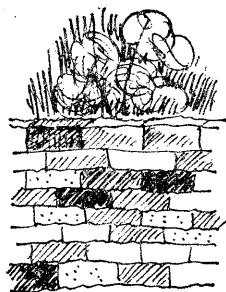
Aは、小柄な男の子で、両親と二歳年上のお兄さんの四人家族で団地にくらしている。三年保育をうけ、私が担任になったのは年中組（四歳児六〇名）の時である。Aは級の中では最も地味な存在であった。

そのAの成長プロセスをとりあげ私の気持と交差させながら「私の保育」についてのべてみたい。

様々な素材にふれてみる

年少組（三歳児級三〇名）になったAは、比較的スムーズに園生活になれスタートする。準備や仕度に人一倍時間はかかるが、自分の事は最後まで自分でする事ができた。

一学期、二学期とAは園にある素材、遊具そのものに興味をもち一つずつ征服していた様に思う。まず一つの素材に対して長時間みる、さわる、ならべる、積み上げるなど様々な



方法で確かめてから、それを使って再現化したり創造したりする。

教師や友達には関心を示さず、自分から他者に対して話すことは皆無である。教師の話しかけにも、必要以上の事は話さないし、むしろ迷惑げである。

この時期のAは、しっかり大地に立って自分の関心事をはつきり定めてそれをじっくり見る、又ある時はその目的自体を捜すために立つ、という事に専念していた様に思う。それはあたかもあの短距離ランナーがスタートラインについた時に似たものを思わせる。自分の全神経を集中させてピタリと定めるその姿は、静かではあるが実際に走っている時よりも大きな気迫を感じさせる。つまりAも素材を使って遊び始めると、表情も態度もゆったりとする、が自分の遊びをみつけるまでは静的であるが、遊びそのものより、エネルギーの大きさとA自身の存在を感じたのである。後にこの時のAの姿がいつも私の心にあつて、彼がおちこんだ時も彼には自分で自分を教育する力があるからと信じさせるベースとなつてゐる。

遊びが固定化する

年少組三学期から年中組五月ぐらゐまでほとんど外で遊ぶことはなくなり保育室ですごす。一人で飛行機や電車、車、ヘリコプターなどの絵をかいたり、乗り物のおもちやで遊ぶ。表情はどちらかといえば沈んだ感じでもくもくと同じ遊びを続けている。

今、思い返してみるにこの時ほどAに対し不安な思いをもつたことはない。一人遊びや同じ活動をしているのが不安なものではない、Aの表情の暗い事が気になっていた。何が彼をしてそうさせているのか知りたかった。しかしその時はA自身にもわからなかったのではないか、そして「何か自分はかわりたい」という内からつきあがる様な衝動があつたに違いない。その心の動きが激しいだけに外面に出る行動は、自分の一番安心できる単純なしかも繰り返しのきく遊びをしていたのではないかと思う。ただその時はその事が全く私には見えなかったが、Aは大丈夫と信頼してそのままにしておいた

のである。

Aの成長記録をトータルでみる事ができる現在、次にくる課題の大きさ故、五か月間のスタートラインでの静止の時間がAには必要だったんだということがわかる。

僕友達てきたんだ！

年中組になった時、二年保育で入園してきた子どもが半数加わる。その中で小柄な男の子Mは一人っ子で育った。Mは近所の小学生と一緒に遊んでいたせいか、遊んでもらう事にはなれているが自分から遊びをみつける事ができない。そのため入園当初より他の子どもの遊びをみている事が多い。しかし遊びの素地はできているので気持の上ではその遊びに参加していた。

Aは、そのMに興味をもつようになる。最初Aは絵をかきながらMを観察する。すわる時にはMの隣りにくる。帰りの仕度の世話を焼く。これらの言動が出て来たのは五月中頃からであるが、六月に入るとAは完全にMを独占して彼をつれ

まわす。「ほくM君と友達になったんだ」といきこんで生活する。

Mも、六月中旬ぐらいいまで環境になれていないこともあってAの行動がうれしかった。しかしそのうちMは自分のあまりの不自由さから、Aの態度に不満をもち始め少しずつAから離れようとする行動が出て来た。

夏休みがすぎ、二学期に入ってからAとMの関係は少しずつ変る。そしていよいよ九月三十日のMの独立宣言にいたるのである。この日の朝Mは登園するとロッカーで着替えているAにむかって「今日はAちゃんとは遊ばないからね」という。そしてさっさと一人で外へ出てブランコ乗りを始めたのである。

この日のMとAを忘れる事ができない。Mはようやく自分の気持を自己主張できたうれしさを、ブランコに乗るという行動に託して空に向かって自分の体と心をとばしている。Aはわけのわからぬ自分自身へのくやしさと、せっかくできた友達に離れていった悲しさに廊下で茫然として立ってブランコの方をみていたのである。

Aは年少組の終り頃から他者の存在に気付き始めた。友達

がほしくなった。

そこで四月新入園児が入ってきた時、自分と類似した行動をもっているMに注目した。幼稚園という場に一年先輩である有利さをいかして安心してMと友達になった。

しかしAは始めての他者Mに対してうまくつきあう事ができない。どうしても遊び始めると、自分の世界や創造する力を充分もっているAは、自分のイメージ通り遊びを展開させてしまう。だからMは、自分の意見を言う事も許されずにそれを遂行するために使われてしまう。

そして夏休み終つての九月、ここで大きな状況変化がおきている。つまり三年保育の子どもも二年保育の子どもも夏休みという時をへて二期をむかえた時、様々な意味で同じスタートに立ったという事である。だからMには、四月五月にあったハンディはもうない。Mの独立はおこるべくしておいたのである。

僕どうしていいかわかんない

それからのAは、よりいっそう友達と遊びたいという欲求が強くなる。Aはある決まった四、五名の男児グループの後にくっつく。じっくり型ではあるが反面要領の悪いAは、そのグループの足手まといになってしまう。だから警察ごっこをすればAだけ「わるもの」の役にされ、すぐ牢屋に入れられてしまうし、積木遊びをすれば作ったものがこわされない様に見張り役ばかり。あげくのはては格好のからかい的になりAにとっては真剣であるばかりに最終的には泣かされてしまう。それでも泣きながらグループのあとについていく。そして十月中旬のホールでの事件がおこるのである。

その日ホールへいくと、そのまん中でAはあらん限りの声をあげて泣いている。それもいつもの泣き方とは違う。「どうした?」とかがんで手を握るとAは泣きながら握り返す。しばらくそうしているうちに泣き声が弱くなって来たので再び「どうしたの?」と聞く。「先生、僕どうしていいかわかんない。だってDちゃんはFちゃんの事やつつけろというしFちゃんの所へいったらDちゃんの事やつつけろっていうんだ。僕どっちをやつつけたらいいのかわかんない」という。とっさにその時私は人間の先輩として様々な答、助言が走馬灯の様に走った。しかし話そうとするとどれもこれもがこの

場のAの気持にあわず結局ただ「それは本当に困ったねー」と言っただけである。

Aが入園して一年と半年間、Aに対する教師の役割は「場」と「素材」と「時間」を準備提供することであり、遊びの内容に応じ、助言刺激することであった。それで充分Aは自分で自分を教育し成長していったのである。

しかしその時は違っていた。「他者」という存在を知ってから、なんとか関係をもちたいとAのあっただけの経験と知恵と体を使って闘って来た。しかしもうわからない。ここで始めて教師の精神的存在が彼に必要となったのである。ここでは「友達とは仲良くしましうね、けんかしてはいけませんよ」といったたぐいの道徳的訓話が必要だったのか、違うと思う。おこった事柄をつきぬけてその奥にあるAの心を他者が理解することによって、逆にAが本当の他者の存在とは何かを感じとることができないのではないか。しかし人間としての成熟度の低い私にはそれを伝える言葉はなく、泣いている現場に共に居るといふそれしかできなかったのであるが。

つなげてもいい？

Aはまた一人遊びに戻った。私はこの頃意図してAと並んで砂場で一緒に遊んだ。Aが遊びに夢中になって自分のイメージを私におしつけてくると「先生には違う考えがあるんだけど」と負けずに主張する。一週間ほど砂場で遊んでいるうちに、Aにとって一つの画期的なことがおきた。

その日もAは朝から一人で砂場で砂を掘って遊んでいた。その横で以前の男児グループとは違う男の子たち五、六人が砂を掘っていた。私はその状況を頭に入れて三十分間その場を離れた。再び戻って来た時Aの表情にふと違うものを感じ少し離れてみていた。グループの子どもたちの穴は大きくその中には面々と水があふれ海になっていた。彼らはお互いのいろいろの話をしながら、水をくんだり、土手をかためたり、更に砂を掘ってそれで海の横に山をつくったりで各自が自由な安定した雰囲気の中で活動を展開していた。

そこへ全く突然隣りで小さな穴を掘っていたAが近寄り「僕の穴とこっちとつなげてもいい？」と、グループに向か

つていったのである。最初は無視されたがAが再び聞くとグループの中で気持の優しいKがまぶし気にAをみながら「いよ」と答えたのである。Aはすぐさま真剣になってグループと自分の掘った穴との間を掘って道をつけ始めた。砂場というよりはどろ場に近い状況からすれば道をつけるという事はかなり地味な大変な作業であった。Aの粘り強さをしてようやくつながったが、単にそれだけの事であって誰もその事に関心を示す者はいなかった。

ふとその時でさあがった道を見てKが「Aちゃん」そっちの方から水を流してみろという。Aが水を流すとそれは地面に吸われてしまうが、二、三回するうちにたどたどしく道の上を水は流れ大きい海までたどりついた。その時、「おやこれはおもしろい」と思ったのであろう全員の子どもが手を休めてAをみたのである。リーダー格のWが「Aちゃんもう一回水流して」という。Aが水を流すと川となって勢いよくほとぼしる様に大きい海に流れこんだのである。それからAは、このグループのメンバーから対等にうけいられ、一員として砂場遊びを経験したのである。

Aは自分で掘った穴をたずさえて友達の前立つ、そして

「つなげてもいい？」と聞く。これは見事だ。場の状況をつなげる事によって自分自身も仲間とつながりたかったのである。そしてAはKの力を借りつつ地味な努力を重ねてそして他者に認められるにまで至ったのである。

Mとの時の様に自分の主張ばかり通しても駄目なんだ。まして、グループの後にくっついて相手の言いなりになるばかりでもないけないんだ。自分の考えもあり相手の考えもありそこでぶつかって認めあって始めて対等な関係ができるんだと、すさまじいまでの体験を通してAは学び体得していったのである。

チャレンジする

それからAはだんだんに一人遊びの時もあれば、偶発的な事から友達と一緒に遊ぶ事もあるなど行動に無理がなく自然にふるまうようになる。

三学期に入ってAは一見不思議な行動をとる。寒い日の朝、ジャングルジムの下の段を登ったりおいたりしている。

そして少しずつ高さを増していく。それでも二週間後の朝までには、数人の男の子とジャングルジムのてっぺんで自動車ごっこをするまでになる。

二月上旬の寒い日、Aは一人庭で小屋の前にたつ、この小屋は短大生と幼稚園主事がつくったもので高さ一四〇cm広さ一坪半ほどの切妻づくりのものである。子どもは、小屋の中心でお家ごっこもするが、この切妻屋根に登る事も大好きである。さてAは意を決して小屋の後にある年長児のつくったはしごに登る。慎重に一段一段登り屋根にたどりつく。はいつくばってようやく屋根の稜線に腰をおろしたAは不安そのものの顔でしばらくそこに居る。そして再び地面に戻った時、初めてAは不敵な笑みをうかべたのである。

子どもの世界には私達大人の知らないランク付や掟がある。級で一番強いのはだれで、二番目はだれでと十番目ぐらいは決まっている。お弁当食べるのがはやいのは△ちゃん、□ちゃんは泣き虫でとその評価は概して正確である。級の男児たちの間で小屋の屋根に登れて飛びおりする事ができるか否かの極めて敵しいチェックがある事を知ったのはAの行動の後である。私の記憶では秋ぐらいいまでは男児のほとんどは

屋根の上に登ったりおりたりしていた。

だとしたらAの胸にはそれがどんなに重たかった事だろう、運動神経の鈍い臆病とも思える程慎重であるAにとってそれはエベレストほどもあったか。それでも彼は自分の実力よりは数段上の目標に向かって挑戦する。そして全く自分の力でのりこえた時、彼は自分自身に勝ったのである。そしてあの不敵な笑いの中に、そこにはとどまらないすでに又次の目標に向かって歩み出すところのAを感じたのである。

最後に

記録を通して、教師の破れ多き事、鈍き事にもめげず、子どもは着実に成長している事が改めて確認できる。私にとって保育とは、教師が子どもに教えられる事、そして子ども自ら教育しようとする力の助け手になる事ができればと思う。

(東洋英和女学院短期大学附属かえで幼稚園)

子どもと共なる日々

依田 満寿美

窓の外を吹きまくる風、その唸るような風音を聞くともなく聞いていると、ふと遙かに遠い日の身を刺すように冷たかった風、息をとめられてしまいそうだった強い風を思い出しました。あれは確か、母とではなく父と、田舎にいる母方の曾祖母を訪ねたとき、木曾川にかかる橋の上でうけた鈴鹿風でした。

非常に厳しい印象でありながら、不思議に満足感と暖かみを思い起こしてしまいます。今ですと大垣からバスで入る濃尾平野の米どころですが、その日はどうしたわけか名鉄電車のある駅から歩いたのです。甘えられないと悟っていたのでしょう、父について黙々と一里歩きとおしたということです。その後随分長い間、一里という道のりが頭にあり、一里は歩けるのだという自信を抱いて

いました。さえぎるもののない橋の上、鈴鹿風は正面に吹きつけ、苦しくて息ができないのです。そのとき、父が、手にしていた大きな風呂敷包みを掲げ私の顔を覆ってくれたのです。その陰でほっとひと息つけたときの安らいだ気持は忘れられません。

こうしてペンを走らせている間も、風の唸りは続いています。父と共に鈴鹿風をうけて歩いた日から、なんと長い年月が経ったことでしょうか。いま私は筑波風を耳にしながら、あの頃の私と同じ年頃の子ども二人を交え、日々暮しています。四人が互に影響しあいながら、親として、子として成長している昨今ですが、いままさに、メディシンボールの大きな玉を前から受けとり、頭上に掲げ、次に渡そうとしている最中だとも思われるこの頃

です。

つい最近もこんなことがありました。テーブルに皆の顔の揃う夕食時やおやつ時には、いつも話に花が咲くのですが、この日のおやつのおきもそうでした。小学一年生の息子(M)と年少組の幼稚園児の娘(A)の話をおきき下さい。

M 「ねえママ、うちのママは、こわすぎもしないし、優しすぎもしない丁度いいんだよ。優しすぎるとね、子どもが馬鹿になるんだよ」

私 「えっ、そう、どういふことなのかしら」

M 「ママは丁度いいんだよ。〇〇ちゃんのお母さんは優しすぎて何んでもほしいものは買ってくれるんだって。××ちゃんのお母さんはこわすぎるんだって。△△ちゃんのママはお友だちがいるときは優しいけど、ほんとはとってもこわいんだって。今日学校からの帰り道でみんなと話してきたことなんだ。いっとくけどママはほんとに丁度いいんだよ。子どもが馬鹿になるっていうこととはね、何んでもほしいものが買ってもらえたら、我慢できないでしょ、ごはん残したいと思って『いいですよ残しなさい』って言われて、残してごらん、大きく

なれないでしょ、そういうことなんだよ」

私 「そう、でママは丁度いいのね、ウーン」

暫く言葉なく呆気に取りられているかと思いついたように

A が「パパは優しすぎるよね」

M 「うん(と肯定してから)、でもそうじゃないよ、僕が小さいとき、パパのところへ来た手紙をやぶって、すごく叱られたもん。ベイスメント(地下室)にとじ込まれたの怖かったよ」

A 「そうか……」

雨、風、夏の日ざしにもめげず、畑の中の道を、二十分歩いて登下校する息子は、ふざけたり喧嘩しながら行き来すると思えば、時にはこんな話もしていることがわかったわけです。

親子が同じ屋根の下で四六時中つきあっていたころは、子どもたちのしていることに目が届き、連続の中では、その行動から心までも察することができたと思っていました。(恐らく思いちがひもあったでしょうが)親の顔が見えなくても不安でなくなり、幼稚園や学校へ出かけ、友だち遊びに夢中になっているいま、子どもたち

には私の知り得ない部分、子どもら自身の世界は広がってきました。が、機会を得れば、言葉や文字によって心の内をより明確に見せてくれるようになったとも考えられます。

この会話のように語られる言葉を通して子どもたちがどのように親をとらえているかわかる場合もあります。概して、子どもを通して知る私自身の姿に気恥しさを感じる場合が多いのですが。まるで、それとは知らず鏡をのぞいたら、顔のどこかに思いがけない汚れがついていて顔を赤らめるように。

接する時間が短くなってきたとはいえ、親子は互いのぬくもりを感じるほどの近いところで継続的にその姿を確かめあい、大きな影響を与えあって生活しています。月曜日の私も、日曜日の私も、不調の私も、元気な私も見られてしまい、時として見られたくないしっぱを捕まれば、しまったと思うこともあるわけです。かといって完璧な人にはほど遠く、未熟な者は未熟なりに努めるしか仕様がありません。子どもたちにこうあってほしいと思う生き方、人柄は教えて伝わるものでもなく、自ら身を

もってやってみて、伝わるものは伝わっていくものと信じます。

ミルクを与え、おむつを取り替え、抱きかかえ、寝かしつけ、泣き声のちがいに神経をとがらせ、笑った、立った、歩いたと一喜一憂し、体当りの育児をしていたころを仮りに第一期と呼ぶならば、今直面している第二期も、多少質的に異なるものの、不安、戸惑いを伴いながら、やはり喜びであり、親をも成長させてくれるものになっています。

春の竹の子とり、うど、わらび、たらの芽などの山菜つみ、小川や湖沼の小鮒釣り、水たまりのめだかすくい、秋の栗拾いや芋ほり、何をしていても、どこで遊んでいても紫峰筑波が眺められます。そこから吹きおろす風が冷たくとも、子どもたちは都会ではとても味わうことのできない恵み多い自然の中で豊かに伸びていくようです。私が風音にふと昔を思い出したように、子どもたちもまた、いつか、生活の一こま、親の姿を思い出し、懐しみながら受けとった玉を次に送って行くのではないでしょうか。

手作りの遊具・教材

山中久江

ペンギンの親子 【三歳児】

材料 牛乳パック

和紙

古新聞紙

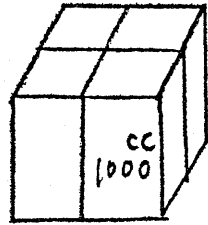
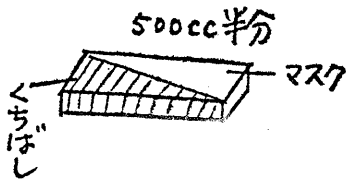
絵の具（黒）

ガムテープ

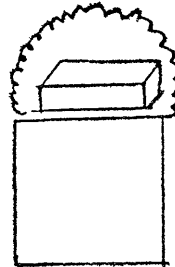
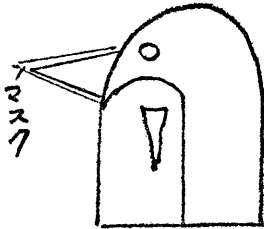
ニス

渋谷区立本町第二保育園の山中久江先生は、身辺にある牛乳パック、ダンボール箱などを活用して、遊具を作っていました。

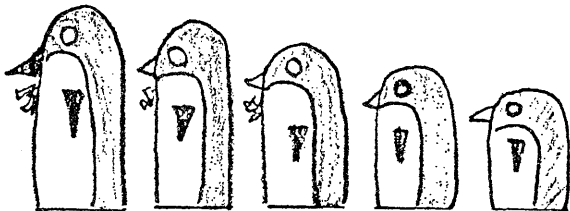
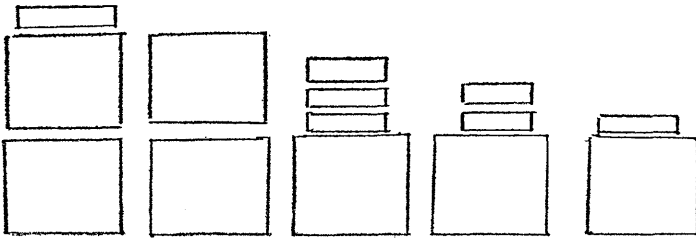
「子どもといっしょに作るんですよ。子どもは器用ですよ。手が筆になって、絵の具をきれいにぬっていたりするんですから……」とおっしゃる先生に、このたび、工夫をこらした手作りの作品を紹介していただきました。



牛乳パック一つの中に
二個入れるとしっかりする



上に500cc分をのせて古新
間紙で丸みをつけ頭をつ
くる



ポロポロ ママ ペン子 ギンちゃん ケビクン

あそびの発展

- ・一つ一つに名前をつける
- ・大きい順、小さい順に並べる
- ・全部でいくついるか？
- ・ネクタイの色は何色か？
- ・マスクをして風邪をひいたのは？
- ・可愛らしいので、だっこしてよろこぶ

ワニの平均台 【四歳児】

材料 牛乳パック

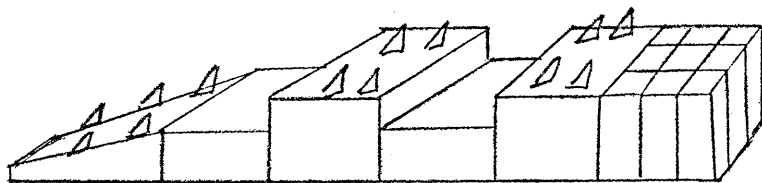
ダンボール箱

ガムテープ

絵の具

あそびの発展

- ・平均台としてあそぶ
- ・三〇cmの幅があるが、背のイボがじゃまで、うまく渡れない
- ・同じものを二台製作して競争



一つのパックの中に二個入れて
しっかりしたものにする。
それを九個まとめて一つの積木
とする。

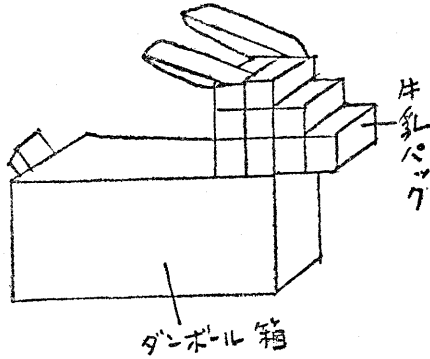
う さ ぎ 【四歳児】

材料 牛乳パック

ダンボール箱

ガムテープ

絵の具



あそびの発展

- ・両足とび競争
- ・ふくらはぎに力を入れないと前に進まない

キリンの親子 【五歳児】

材料 ダンボール箱

牛乳パック

和紙

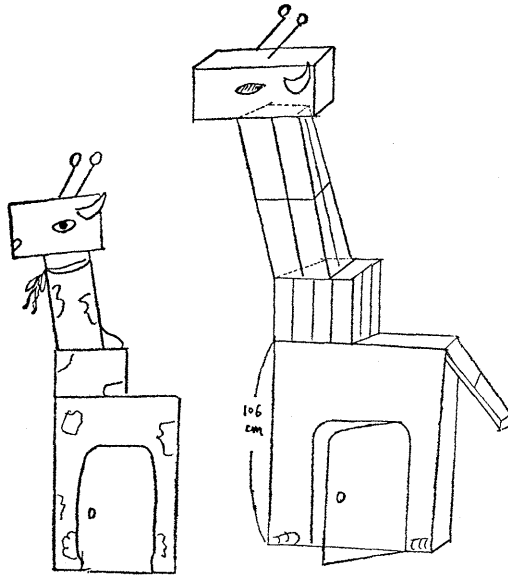
紙ねんど

絵の具

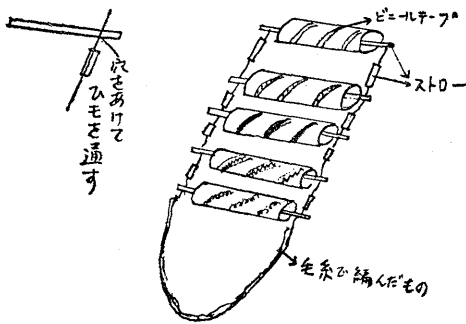
古新聞紙

あそびの展開

- ・大きいキリン、小さいキリンの家四軒、それぞれ中に入ったり、上に二人は乗ることができ
- ・とびらの開閉は楽しい
- ・ままごとの家として遊ぶこと



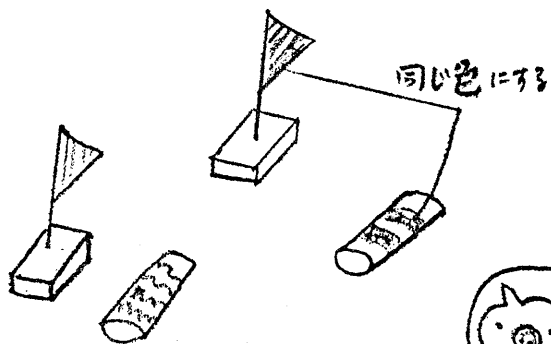
汽車ポッポ



廃物利用のこどもの玩具

◆トイレットペーパーの芯の利用

芯がくるくるまわり不思議さと美しさによりこども



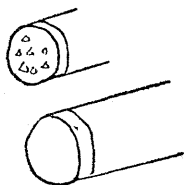
お面の作り方

少々大きめにボール紙で寸法を合わせる
新聞紙を張って、その上に色をぬる

トイレットペーパーの車をうちわであおぎながら、同じ色の旗のところまで行く
うちわとお面が同じなのでよろこぶ

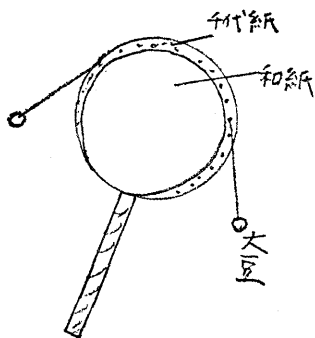


ペーパーの芯の中には小さいセロテープの芯が入る。そこで、セロテープの芯にセロファンをはり、おしこみ、つや紙を切って入れてから外側を和紙でふさぐ。

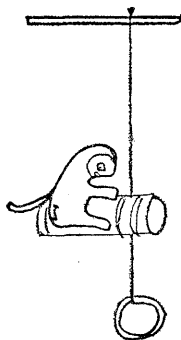


何が見えるかな？

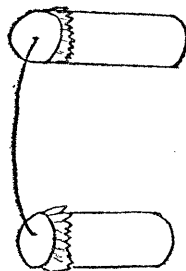
でんでんだいこ



トイレットペーパーの芯にサルのおもりをホチキスでとめる。いくつかの動物別にして、のれんをしてもおもしろい。



セロテープの芯



糸でんわ

和紙をはり
縫糸でつなぐ。

セロテープの芯の利用

保育過程の分析

—三歳児クラスの一年間—

大滝 ミドリ

はじめに

母親の膝元をまだ充分に離れ切っていない、幼さを多分に残している三歳児。すでに自分自身が活動の主体者となっている遅い五歳児。

この幼い三歳児がどのような保育体験を経験しながら、あの遅い五歳児と変容して行くのであろうか。

保育場面を継続的に観察する中で、この変容過程を明らかにしたいと考えた。

観察対象とする保育場面の決定はつぎの二つの理由にもとづいて行なった。

①保育場面を想定した場合、そこには「保育者と子どものかかり」「子どもと子どものかかり」「子どもとものとのかかり」の三つの場面が考えられる。これらの三つの状況は、それぞれに子どもに大きな影響を与えるものである。

特に三歳児クラスでは保育者がどのように子どもにかかわれるかが、他のかかわりをも規定する程に重要なものであろうと思われる。

②保育場面をVTRで記録する場合、中心となるものを予め、決めておいた方が撮影しやすい。

これらの理由から保育者を観察の中心におき、観察対象となる子ども達は「保育者からかわった子ども」「保育者にかかわりを求めて来た子ども」に限定した。

しかし結果的には全員の子ども達が観察対象となった。それ

は、観察時間中(同一の)に全員の子どもが何らかの形で保育者とかかわりをもっているからである。

保育場面の観察を通して、我々は単に一つ一つの行動の頻度の分析に終るのではなく、保育者と子どもがかかわることで、共に体験しててであろう、その世界を、保育の過程の最も大切なものとして、何とか視覚化し、かつ量的にも、質的にもとらえたいと考えていた。その意味からいえば、この研究の目的は「保育過程の分析」とするよりもむしろ、「保育過程を分析するための方法の模索」とすべきであったかもしれない。

なお、ここでは、観察を通して見いだされた子ども達の行動についての我々の意味づけ(解釈)を中心に報告する。

研究方法

対象は、三歳児クラスの十五名(男児八名、女児七名)とクラス担任である保育者一名である。

観察は一九七四年四月～一九七五年三月まで、原則として毎週一回、約一時間に亘って行なった。

観察場所は、都内T私立大学の付属幼稚園および同大学構内で

ある。

資料の収集は、主にVTRと保育者が身につけているテープレコーダーによって行なった。それらの記録は収集後すべて文字化した。なお、文字化するに当っては、単に言語的行動のみを文字化の対象とせず、非言語的な行動およびその行動が生じている状況などについても文字化した。

結果の分析に当っては、VTRを反復視聴しながら文字化された記録について行なった。最初の分析は二名の観察者が別々に行なった。ついで二名の分析結果を照合し、不一致を生じた箇所については、改めてVTRを一緒に視聴して決定した。

結果と考察

(a) 子ども達の行動領域の拡大について

入園当初、目新しい玩具に誘われて遊びだす子どもは十四名中、四名にすぎなかった。自分の唯一の所有物である引き出しに寄り添って静かに涙を流している子、大声で母を呼びつづける子、保育者に自由画帳や粘土を与えられても、コチコチになって

いてまるでロボットのようなきごちない動きをする子、保育者に何か声をかけられても、入って来たままの位置に立ちつくす子。

このように、広い幼稚園の中で、子ども自身が所有しうる空間が、その子どもの立っているその場所のみであったものが、保育者のそばにすることで安定感を得るのであるうか。保育者の後にゾロゾロとついて歩く。そのことで子どもが所有する空間は、点から面へと拡大し、さらに他児の活動にも注目するようになり、保育者の回りにいた子ども達が、一人、二人と離れて行く。

しかし保育者を離れ、独自の活動空間を持てるようになった子ども達も、それは保育者から完全に分離した空間を所有しているわけではない。

ふと目を上げたその視界の中に保育者の姿がないと「先生！」と自分の活動を中止してまでも保育者の姿を捜し求める。捜し求めると少しの間、保育者にまつわりつき、また離れて行く。

保育者との分離は視覚的に接触可能な範囲での分離にすぎない。

しかし、このような保育者と子どもとの関係も三学期には変化して来ていることを知らされる場面がある。

保育室にいた保育者が偶然のことから保育室から視覚的に隔絶された遊戯室で、観察時間中のほとんどを過ごすことになる。

保育室に残った子ども達はそのまま活動を継続し、子ども側が必要が生じた時（遊びに誘う、援助を必要とするなど）、保育者の所まで行き、必要が満たされると再び保育室に戻って行く。

すでにこの時期の子ども達は（女児二名を除いて）保育者の姿が見えるか否かによって自己の活動に混乱を生じないほどに、主体的に活動できるようになって来ている。さらにこのことは保育者との関係で視覚的なものから内在化（潜在化）したものと移行して来ていることを示しているものと思われる。

(b) 子ども同士が共に楽しむこと

①ままごと

一年の間、しばしば観察された「ままごと」についてみることにする。

一学期における「ままごと」は子ども達がそれぞれに独自の物と空間を保持し、それらの物と空間とが他児との間で共有されることはない。全く平行的な遊びである。そのため保育者も、それぞれの子ともと個別的なかわりあいを持ち、保育者が子どもと直接的にかかわる時間がその子どもの活動の持続時間を決定する観さえある。このように子どもの活動の中心的な部分に保育者

が位置づけられている。

二学期における「ままごと」は一つのテーブルを数人の子ども達がとりかこみ、客と接待者の役割をとることが出来るようになっていた。この時期には物（テーブル）と空間（場所）が子ども達に共有され、そこからイメージの共有化が生じて来ている。

しかし、子ども達に共有される領域（子ども同士がかかわる部分）が狭く、流動的で、偶然的な要素によって分断されてしまう不安定な共有化の状態にある。

三学期に認められる「ままごと」は、例えば、保育者の所にハンカチを髪に止めて欲しいと来たT子に保育者が「すでに何人かの子どもが保育者にハンカチを止めてもらっている」あら、みなさん食堂のお姉さんになっちゃったの？」というとき、T子は「（自分は）お母さんだもん」と自分の役割を説明し、他児の役割についても説明する。

その後、継続された「ままごと」の中でもT子は「K子！ K子！」とまるで母親が子どもを呼ぶかのような調子でK子を呼び、呼ばれたK子も「はい」と子どもの役割をとる。相互の役割は混乱なく継続する。「ままごと」の役割と離れた日常場面ではT子は「K子ちゃん」と呼んでいる。

このように現実から遊離したイメージの世界で自己に与えられ

た役割を踏まえた活動が複数の子ども間でなされる背景には、相互の役割の認知ともいえるべき、一つのルールにもついた共通のイメージが確立しているものと思われる。

「ままごと」のように何度も何度も子ども達に経験されて来た活動においては、このように安定したイメージの共有化がなされている、同じ三学期に観察された「ボーリング」では、ほとんどイメージの共有化はなされていない。

数人の女兒がジュースの空缶を立て、ボールを転がす「ボーリング」をやっている。子ども達がそれぞれ勝手にボールを転がすため遊びが混乱している。保育者は、ピン立ての役として仲間入りする。またボールを転がす位置にもラインを引くことで、子ども達の中に一つのルールを挿入する。

しかし子ども達にはルールの共有化はなされず、それぞれが勝手にボールを転がし、それぞれに楽しんでいる。

このことは、子ども達の間遊びのイメージの共有化がなされるためには「ままごと」の初期に認められる平行遊びのように、まず子どもの一人一人が楽しむ時期を十分に体験する必要があることを示しているものといえよう。

②人形劇

二学期、保育者の所に女児三名が、「人形劇が始まるよ」と知らせに来る。保育者は客席に着く。すでに何人かの子ども達が席に着いている。演者（先程の女児三名）と観客は一枚の小さな衝立によって空間的に分けられている。別の所に屋台を出している男児が「切符かってください」と来る。保育者は客席の子ども達を誘って切符を買いに行く。切符売りは「何か当るんだよ」「チョコレートだよ」と切符の説明をする。人形劇の切符ではないらしい。再び保育者は客席に着く。演者は三人。それぞれ勝手に競うかのように人形を出す。ほとんど発話はない。演者自身に向かつて人形劇をしている観さえある。それでも観客は席についている。この遊びには十三名全員（二名欠席）の子ども達が参加している。

演者、観客、切符売りが、それぞれの役割の間にどれ程の共有領域を持っているか、疑問な点もある。

しかし全員の子どもの世界が一つの世界を持っていたことは確かである。このように多くの子ども達の間の一つの世界が共有された理由として、保育者のはたした役割（例えば、切符を買いに行き、また客席に戻る行為）とそれぞれの役割が所有する空間が「もの」によって、独立性を保持していたことをあげることが出来る。

このように大まかな役割の分かれてあったものが三学期には、一人の演者が二つの人形をあやつりながら、対話をするというように、自分と人形とを離し、人形を操作的に扱いうるようになっていく。これはまた演者を観客との関係でとらえるようになっていくことをも示しているといえよう。

(c) 回り道

二学期、保育者はままごとをしている女児に誘われてそばにいたK子と共に客として仲間入りする。女児達の隣でままごとをしている男児も女児の仲間入りをしている保育者を誘う。誘われた保育者は女児達に「さようなら」をいって、男児の所を訪れることにする。保育者は子ども達のイメージにおける空間の拡大をはかる。「Tちゃんはずーっと、ずーっと遠いのよ」と回り道をして行くことを提案する。

しかし、保育者を早く迎えたいと思う男児にとっても、保育者と一緒に行こうとしているK子にとっても、物理的に近い距離を「ずーっと、ずーっと遠いのよ」といいながら、男児の待つている方向とは別の方向に行こうとしている保育者の行為は納得されない。

K子は保育者の手を引いて、直線的に男児の所に行こうとし、

また男児も大声で「ねーこっちだよ！」と呼び、保育者の所までとんで来て「こっちだよ」と教える。

それらの子ども達に対して保育者は、「まだずーっと歩いてか
ら行くわね。Tちゃんのお家、遠いんだもん。Tちゃんのお家行
くまで遠いんだ！」といいながら、さらに遠回りをするために、
保育者から出て行く。男児達は競って保育者のあとを追いかけて、
先回りをして、保育者から見える場所に陣取り「こっちだよ」(ま
まごとの家がここに引越したの意)「こっちだよ」と口々に保育者
を呼ぶ。

保育者が意図した回り道は、結局子ども達には理解されず、子
ども達の遊びを混乱させる結果に陥っている。

虚の世界を虚として遊ぶ場合、つまり「ままごとの料理を食べ
る」というように「無いもの」を、「有る」かのごとくとりえて
ふるまう時、子どもはその虚の世界を子ども自身も充分に楽し
み、また保育者にその世界を共有してもらうことを、この上もな
い喜びとしている。

子ども達が創り出した虚の世界で、それを共有しながら保育者
がふるまうことは何ら遊びを混乱させないのに対してここで認め
られた混乱は何を示すのであろうか。

子どもの世界を共有してくれる保育者と、子どもの世界を離れ

て存在する保育者そのものとは子どもにとって異なった意味をも
っているのではないだろうか。

つまり、子ども達にとって保育者の存在は、絶対的な疑う余地
のない実存在の世界である。その実の世界に「近き」を「遠き」
とする虚の世界が入り込むことは、とうてい子ども達にとって共
有しえない世界であったのではないだろうか。

しかしこれ程までに混乱を呈した回り道も、三学期には子ども
達から保育者に回り道を要求するようになっていく。

T子は保育者をままごとに誘う。保育者はままごとコーナーに
来て「玄関どこですか」と尋ねる。T子は「あの、こっちから右
に曲つてすぐの所」と指さすことで回り道を示しながら最終的に
玄関として指した所は、保育者の立っている前にある衝立であ
る。

T子にとって目の前にある衝立は、単に物理的な玄関としての
機能をもつ「もの」として存在しているのではない。

そこには、目には見えない、もっと多くのイメージの世界で創造
された豊かさを添えた玄関として、その衝立ては存在している。

このように見える「もの」に縛られず、見える「もの」を超え
てイメージの世界を創り出せることが回り道を可能にしたものと
思われる。

以上、三歳児クラスの子どもと保育者のかかわりについて、一年間の観察の中から、同じ線上にその形をかえて顕在化した行動について多少の意味づけを試みた。

一回、一回の観察では見えなかった子ども達の変化も、一年の流れの中で見ると、その大きさに驚かされた。

改めて、保育研究における継続研究の大切さを知らされた思いがした。

おわりに

子ども達の観察を終わった今でも、記録を読みかえす度に、子ども達の姿が生き生きとよみがえって来る。

この子ども達の姿をどう外にひっぱり出したらいいのだろうか。

保育者と子どものかかわりあい分析については三宅氏等の研究を参考にして試みた（結果は後述紀要に掲載）が我々が目的とする保育の過程を視覚化することは充分にはできなかった。さらに分析方法について検討を重ねるとともに、今後の研究においては、個々の子どもの一年間の保育体験の内容について見て行きた

いと思っている。

研究方法その他についてご意見、ご示唆をいただければ幸いです。
ある。
(東京家政大学)

(なお本研究は川合貞子、小林京子との共同研究である。本研究の詳細は東京家政大学紀要の第十六、十七、十八集に掲載されている。)



保育の体験と思索

―子どもの世界の探究―(十五)

津 守 真

精神の原型を生きる遊び

子どもが自分自身となって遊ぶことができるころには、人間の精神の原型があらわれる。すなわち、そこでは、子ども自身、自分のかかえている問題を解いていこうとし、また、自分なりに世界を探究しようとしている。そのことは、すでに、いくつもの遊びの例に見てきたことであり、いたるところに見られることであるが、ここで重ねて、同じ遊びの中で、ほとんど同じような活動をしているながら、三人の子どもがそれぞれのやり方で、違った遊びをしている例をあげる。

十月八日

A (五歳) P (四歳) Q (三歳) Y (二歳) の四人が、最初のうち物のとり合いをしながら遊んでいたが、そのうち落ち着いて遊びはじめる。

Yは、長いつみきを布の上に並べ、「どうもろこし、こうやってどうもろこし」とひとりごとを言いながら布に包む。「こーやって、こーやってしばって、おべんどうみてー」とくるくるまわって、だれかにみてもらおうと思つてさがす。私が「いいの

ができたねー」というと、それを持って歩きまわる。

それぞれそがしくひとりずつ活動している。Yは包むこと、

Qは容器につみきをいれること、Pはいろいろな物をごたごたと箱につめ、ひとつずつとり出して手でいじり、それから、箱を押して歩く。Aは、箱の中に色つみき、模様のついた布などをきれいに並べ、気に入るまで並べ直す。それから、布をルーペで見つて、「きれい」と言つて私に見せにくる。そして、フィッシャーの「たんじょうび」の絵本を開いて見ている。……

この遊びはまだ続くが、ここに掲げた、つみきを並べて遊ぶ活動だけを見ても、四人の子どもの個性があらわれているのを見ることができよう。Yはつみきを布に包んで見えない内部にいれる、それを出してまた包むなど、内部にいれたり、外に出したりすることをくり返す。Pは、つみきと一緒に、いろいろの種類のブロック、プラスチックの人形、頭や手のとれた動物、ままごとの皿や鍋など、さまざまなものをひとつの箱にいれ、それをつとり出して調べる。異質な物を並べて遊ぶというのはこの子どもの遊びの特色である。Aは、箱の中を美しくする。美しく華麗なものを作り出そうとする努力が見られる。フィッシャーの『たんじょう

うび』も誕生祝の華麗なケーキの絵のついた本である。同じ場所で、同じような物で遊んでいても、異なったことを追求しているのが見られて面白い。

いずれも、それぞれの子どもの個性でもあるし、また、だれの心にも共通にあることである。物を包んで見えなくしたり、また見えるところに出したり、外からは見えなくても、内部に何かが入っていること、内部には更にまた内部があること、それを外にとり出す時もあること。互いに異質な物が集まって一つの空間を形成することを認識し、試み、そこに動きを作ること。自分の心に憧れをもって思い描く美しさを目に見える形で作り出そうとすること、等々。遊びの中で、子どもたちは、くり返し、こうしたことを試み、探索し、そのことに身を没して時を過している。そして、時々、一緒にになり、互いに感心したり、ぶつかりあったり、力づけられたりして、遊びはつづいてゆく。

四歳の秋は、幼稚園でも、子どもたちは充実して遊べる時である。おとなが一緒に入って、それなりに面白く遊べるし、また、子ども同士だけで遊ぶことで、もっと落ち着いて、ゆっくりと遊べる時がたくさんある。幼稚園では、子どもは、自分を幼稚園生

活に適應させることもできるようになるので、おとなを困らせることも少なくなるのであるが、家庭では、自分のいろいろの側面が出るので、おとなを困らせる場面もたくさんある。次に丁度このころにあらわれた家庭の生活場面の事例をあげる。

夜、床にはいってから何度も起きてくること

十一月八日

Pは、夜、ねにいつてから何度も起きてくる。その度に、ついでいき、ねかしにいつても、また起きてくる。ふとんの上に取り上がったり、上下さかさまにねたり、わるさをきわめる。もしもこの日の、ひるまのできごとを知らなかったら、おとなも癩癩を起しただろう。

この日は幼稚園の参観日だった。Pは、そのときおもしろをして、そのあと母親にくっついたきりだった。先生はいそいで別の部屋につれていって、他の子どもには分らなかったけれども、き

つといろいろ、心にわだかまりがあっただろう。夜ねてからは、ひるまの当惑が意識の表面近く浮かび上がってくる。ねにいつてから何度も起きてくるのは、こうしたひるまのできごとと当惑と関係があるだろう。

この日は、ひるまのことをおとなは知っていたから、何度でも起きてくることをおとなは理解をもって見ることができた。しかし、もしも、ひるまのことを知らなかったら、叱ったり、どなりたりしただろう。そうしたとき、子どもは決して弁解もしないで、にやにやしたり、わめいたりするだけであろう。こう考えると、おとなが怒りたくなるような行動は、何か、おとなが知らないところできったことと関係があるに違いない。おとなにとって、がまんがならないような行動ほど、その裏には、子どもにとってどうしようもない感情があるのではないだろうか。

普通は、ひるまの子どもの生活の中のできごととおとなに分らず、子ども自身の当惑の結果起きる行動だけがおとなの目に見える。その受けとめ方によっては、子どもにかわいそうなことをしてしまうことになる。

洋服を着がえようとしなさい

十一月二十六日

Pは夜ねる前に、洋服をなかなか着かえない。上衣を一枚ぬくと、落ちていたはさみで切り抜きをはじめる。「早くしなさい」と言われても、「もうひとつあるんだ」と言っても紙を切り抜く。

「洋服をきかえてねにいこう」と言っても洋服の釦を外したまま、途中で椅子をおり、落ちていた箱をいじる。いじりながら「はるこせんせい ものおきに入つてよく考えてらっしゃい」と言つて洋服をぬぐ。母親が「それぬいで」とブラウスをぬぐのを手伝うが、ブラウスをぬいでぐにやぐにやする。母親がシャツをぬがせるが、いすよりかかつて、ぐにやぐにやして、注射をしたところが痛いと言つて文句をいう。

母親が気をかえて、「Pちゃん きつとねまきをきられないんだわ」と言つて目をつぶると、Pは急いで着はじめた。母親が「もうどうせだめだ」と言つと、Pは歌を口ずさみながら、どんとん着はじめ、私のところに来て「ねー、早くきかえちゃおうね」

と言う。母親は目をつぶっている。釦をかけながら、わざと、「あー、まんがおもしろいなー」と言う。母親が「まだまんがよんでるらしいぞ」というと、P「はい もうおわり。できた」という。母親「なにができたんだ」と言つて目を開いて、一緒に笑う。

目を閉じること——意志を停止させること

このころ、Pは、この例のように、自分でできるのにやらないということが多い。そのことは、しばしば見られることであるし、何も問題としてとり上げるべきことでもない。身辺自立のこととは、一度できるようにすれば、それからあとは常にできて向上しつづけるというような直線的進歩をつづけるものではない。それは現象としては、できるようになる時期やできなくなる時期を交替反復しながら、全体としては上昇方向に進む。ここで私がとり上げたのは、着がえるのがいやだと言つていた子どもが、おとなが目をつぶっていると、どうしてやる気になるのかという点である。

この子どもは、夜になつても、まだ寝にいきたくないのだから、ねにいくように言われても、何とかして起きていようとす

る。おとなは、何とかして定時にねかせようとし、その準備をはじめ、起きていようとする子どもの気持の方向とは逆の方向におとなの言動が向かっていることは、この記録から明らかである。

目を閉じるということは、おとなが子どもに対して向ける、方向をもった意志を停止させることである。「早くしなさい」「やりなさい」「ぬぎなさい」という時のおとなの目は、子どもを射るように見つめている。むかし、ギリシヤの哲学者エンペドクレスは、目から光が発射していて、それによって物を見ることができると考えたという。物理的には、目から光を放射していないかもしれないけれども、こういう時の子どもは、おとなの目から強力なパワーが発射されていると感ずるのであろう。視線という語があるように、われわれも、他人の視線に圧せられる力を感ずることがある。蛇のように曲折した視線に出会って、たじろがされることもある。そのおとなが目を閉じたときには、その視線は方向を消し、力を失う。

ある方向をもった力は、それに反撥する力を呼び起こす。一方的に力を加えた場合には、相手が従順に従っているように見えても、その背後には反撥する力を強めていることは、たいがいの場合に認められる。早く着かえさせようという意志を強めれば、着か

えまいとする力はそれだけ強くなる。もっと強く言えば、子どもはそれに従うだろう。けれども、そのことが、子どもに別の反応をひき起こしてゆくだろう。

眼を閉じて相手に加える力が消えると、子どもの側の反撥力も消えて、それまで反撥力の下にかくれていたその逆の力がはたらかきはじめる。そして、子どもは自分で選択して、自分で行動をきめるであろう。自分から行動しているところには遊びの例で分るように、子ども自身の姿があらわれるから、おとなも、その位相で、子どものテンポで一緒に進むことができる。

目を閉じるということが、相手に向ける力をなくすることであるなら、目を開いているということは、どういうことになるだろうか。目を閉じることの作用から推論するならば、目を開いているときにはそれだけで、相手に力を加えていることになる。「見る」という精神作業においては、「見る」はたらくき自体は意識されないで、見る内容だけが詳細に意識される。見るはたらくきにもいろいろある。「見張っている」とときには、視野をできるだけ大きく一ぱいに開いて、見ているすべてのものを、己れの目の中に食いつくすかのようにある。見るものを、自分流儀にあてはめて、自分の思うようにしようとするときには、見るものすべて食べて、嚙んで消化してしまうかのようにある。「見守る」ときに

は、相手に向かう力は緩和されるが、一定の範囲から外に出ないように、外部から侵入するものがないように、その状態が保たれるように、たえざる緊張がある。見るはたらしきには、そのほかいろいろの精神作業が伴うが、ここではこれで止める。

目を閉じる時には、こうした精神作業が停止する。子どもの側からいうならば、おとなの意志が停止したときに、子どもの自発的意志がはたらしきはじめ、おとなの意志とも対等に、自発的応待をすることができるようになる。それは、おとなが見張る目をもっている間は不可能なことなのである。

保育や教育は、子どもに、ある特定のパターンを身につけさせればよいものではなくて、子どもが自分らしく、自分の課題を追求しつつ生きることがを根本前提とするものであると思う。そのとき、しばしば、おとなは「見張る」おとなであることをやめて、目を閉じることを必要とするのではないだろうか。

現実と遊び

ここに掲げた場面でもう一つ注目する点がある。それは、ここで、おとなが本当に目を閉じて眠ったりしたのではなく、仮に、一時、目を閉じているのであって、全体が遊びとして行なわれて

いる点である。子どもも、おとなが目を開いているのはわざとであることを承知しており、目を開いたときにおとなを驚ろかそうというように、子どもの側の意志もはたらい、おとなのやりとりを楽しんでいる。衣服の着脱というのは、場合によっては、現実だけで終始する可能性の大きい場面である。それがおとなが目を閉じて、子どもに向かう意志をやわらげたときに、おとなのやりとりを楽しむ遊びに転換された。おとなの側から言えば、目標に直線的に向かう意志から、瞬間を共に味わい楽しむ過程への転換である。

このように、同じことをしていても、そのことを楽しめるようになったときに遊びとなる。ここでは、子どもとおとなと、互いにやりとりを楽しめるようになったときに、互いに分りあえるものを見出したといえるだろう。現実が遊びとなったときに、人間相互の間の根底にあるものにふれることができたのであると思



う。

四月、出会いの季節の訪れである。未知への不安と新しさへの期待で、子どもたちは、身体一杯に緊張して園に現われる。彼らを迎える期待と不安で、保育者もまた、緊張している。

「ここにいる一人のおとなは、自分にとって、果して敵か、味方か」

「ここに出現した一人の子どもは、自分に心を開いてくれるだろうか」

お互いがお互いを探り合いつつ、新しい一日が始まるのだ。

子どもと保育者にとって、何もかもが未だ不確かなこの時期に、ただ一つ、確かに把握できるように思えることがある。それは、お互いの現身まゐりみを、お互いがとらえ合っている、ということだ。まなざしでその姿を、耳を傾けてその声を。そして、何よりも、手を差し延べて、その「あたたかさ」と「柔かさ」を。

子どもたちの前に、ひよこが連れて来られたことがあった。彼らは、順番にそれを抱いて歓迎した。と、その時、おくれて来た子どもに一人が声をかけた。

「ひよこがいるの、あたたかいから、可愛いわよ」

彼らにとって、ひよこの愛らしさは、その黄色く可憐な姿態でも、稚い鳴き声でもなかった。それは、「あたたかい」とか

ら、可愛いのである。皮膚の表層に触れる「ぬくもり」は、同時に、心の深層を

あたためる「生命あることの喜び」なのだ。

子どもたちにとって、他者と共にあることの意味は、「あたたかさ」と「柔かさ」において、とらえられる、ということも可能であろうか。

四月、それは、子どもらとの間に、共存のあかしとして、「手」の意味が、一きわの光を帯びる季節である。(本田)

幼児の教育 第七十七巻第四号

四月号 © 定価二二〇円

昭和五十三年 三月二十五日 印刷

昭和五十三年 四月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良がございましたら、おとりかえいたします。

53年度 キンダー 科学教材シリーズ



●年間6セット 1,500円 各250円 ●年間を通じて、カリキュラムに組み入れられる教材を選んであります。

○4月以降、隔月にお届け致します。○キンダーブックと合わせて効果的にご使用下さい。



4月

さいばいセット

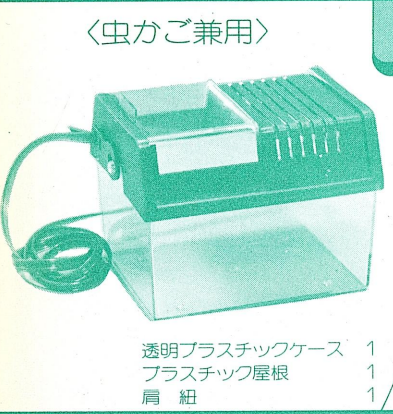
プラスチック鉢・皿 各1 鉄製シャベル 1
朝顔・二十日大根の種 1袋



10月

みちろうぼう

2連式透明カップ 1
2連式球根受皿 1
クロッカス球根 2



6月

かんざつケース

〈虫かご兼用〉

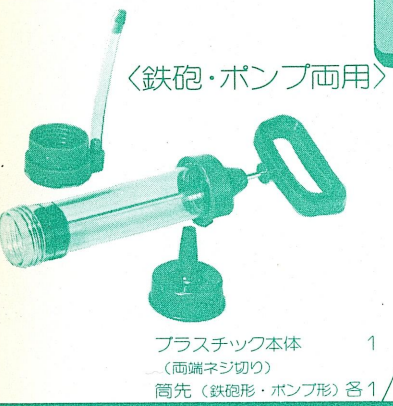
透明プラスチックケース 1
プラスチック屋根 1
肩紐 1



12月

はびるま(ウチン)

透明プラスチックケース 1
各種歯車 4
ペル 1
長針、短針 各1

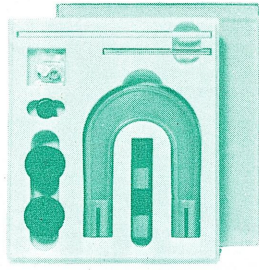


8月

みずでつぼう

〈鉄砲・ポンプ両用〉

プラスチック本体 1
（両端ネジ切り）
筒先（鉄砲形・ポンプ形）各1



2月

しつせい

馬蹄形プラスチック本体 1
各種磁石 8
竹ひご、鉄棒 各1
鉄片、アルミ片付

53年度 フレーベル館の 月刊7誌

“大きく、ゆたかな子どもに育つことはいい”
この願いが、たゆまぬ研究、新鮮な企画となり、キンダーブックの長い歴史を築いてきました。今年から『キンダーメルヘン』を創刊し、絵本の領域を広げるとともに、各誌内容をより充実させました。(価格はいずれも据え置きといたしました。)

創刊

〈4歳児向〉



情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック 1—情操
4月号 『はやく おおきく なあれ』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 200円

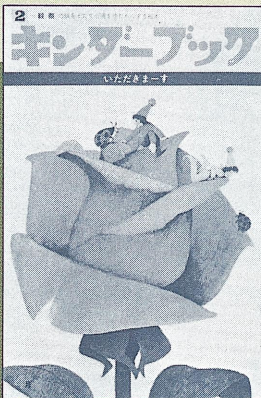
年少児向



幼児らしい夢をそだてる絵本
キンダーメルヘン (A)B判・厚紙製本
4月号 『くまのくつやさん』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 200円



園児をもつ親のための専門誌
ホームキンダー
4月号
特集 『しつけ・子育ての第2ステップ—家庭のルール 社会のルール—』
団体購読価 200円



観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック 2—観察
4月号 『いただきまーす』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 200円

年中・年長児向



幼児の美しい心を育てる
キンダーおはなしほん
4月号 『ぞうのひっこし』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 200円



保育をゆたかにする **保育専科**
実践的保育専門誌
4月号 『“自由遊び”の楽しさおぼくし』
特集 『新学期をうまく乗り切る方法』
定価 300円



科学する心を育て自然に親しませる
しぜん—キンダーブック 3
4月号 『たんぽぽ』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 200円

